

**WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus**



**WebSphere Business Integration Server
Express インストール・ガイド (Linux 版)**

バージョン 4.3.1

**WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus**



**WebSphere Business Integration Server
Express インストール・ガイド (Linux 版)**

バージョン 4.3.1

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、79 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 に適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus
WebSphere Business Integration Server
Express Installation Guide for Linux
Version 4.3.1

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

本書について	v
対象読者	v
関連文書	v
表記上の規則	vi
本リリースの新機能	vii
リリース 4.3.1 の新機能	vii
第 1 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール -- 概要	1
次のステップに進む	2
第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示	3
Launchpad の始動	3
Launchpad の停止	6
Launchpad から製品の「クイック・スタート・ガイド」を表示する	6
次のステップに進む	6
第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール	7
必要なソフトウェア前提条件の識別	8
選択されたソフトウェア前提条件のインストール	13
GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のインストール	22
GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のアンインストール	30
次のステップに進む	31
第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理	33
WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動	33
InterChange Server Express のセットアップ	34
次のステップに進む	36
第 5 章 インストールの検証	37
System Test サンプルを実行するための説明の検索	37
次のステップに進む	37
第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール	39
GUI による Adapter Capacity Pack のインストール	39
GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール	43
次のステップに進む	44
第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール	45
GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール	45
GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール	48
次のステップに進む	49
第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成	51

System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express の使用	52
System Monitor および Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用	55
WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール	57
次のステップに進む	58
第 9 章 システムのアップグレード	59
システム前提条件の適合	59
既存のシステムの準備	60
WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へのアップグレード	62
新規のアップグレード・バージョンの始動	66
アップグレードの検証	67
アップグレード・バージョンのテスト	67
アップグレード・バージョンのバックアップ	67
次のステップに進む	68
付録 A. ハードウェア要件とソフトウェア要件の適合	69
ハードウェア要件の確認	69
ソフトウェア要件の確認	69
データベースの最小必要要件の確認	72
ユーザー・アカウントの作成	73
付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus およ び Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール	75
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール	75
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール	76
Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール	76
Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール	77
Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール	77
Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール	78
特記事項	79
特記事項	79
索引	83

本書について

IBM(R) WebSphere(R) Business Integration Server Express 製品および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品は、InterChange Server Express、関連する Toolset Express、CollaborationFoundation、およびソフトウェア統合アダプターのセットで構成されています。Toolset Express に含まれるツールは、ビジネス・オブジェクトの作成、変更、および管理に役立ちます。プリパッケージされている各種アダプターは、お客様の複数アプリケーションにまたがるビジネス・プロセスに応じて、いずれかを選べるようになっています。標準的な処理のテンプレートである CollaborationFoundation は、カスタマイズされたプロセスを簡単に作成できるようにするためのものです。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express システムおよび IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのインストール方法とセットアップ方法について説明します。

特に明記されていない限り、本書の情報は、いずれも、IBM WebSphere Business Integration Server Express と IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus の両方に当てはまります。WebSphere Business Integration Server Express という用語と、これを言い換えた用語は、これらの 2 つの製品の両方を指します。

対象読者

本書は、Linux(TM) 環境で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、配置、および管理を担当するコンサルタントやシステム管理者を対象としています。

関連文書

本書の対象製品の一連の関連文書には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のどのインストールにも共通する機能とコンポーネントの解説のほか、特定のコンポーネントに関する参考資料が含まれています。

関連文書は、<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> でダウンロード、インストール、および表示することができます。

注: 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらの技術情報や速報は、WebSphere Business Integration のサポート Web サイト (<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>) で参照できます。適切なコンポーネント領域を選択し、「Technotes (技術情報)」セクションと「Flashes (速報)」セクションを参照してください。

表記上の規則

本書は、下記の規則に従って編集されています。

<code>courier font</code>	コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報など、リテラル値を示します。
太字	初出語を示します。
<i>イタリック</i>	変数名または相互参照を示します。PDF ファイルを表示した場合、相互参照は青色のイタリック体で表示されます。相互参照を選択すると、目的の情報にジャンプできます。
<i>italic courier</i>	入出力情報などのリテラル・テキストの中の変数名を示します。
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">枠付きの <code>courier</code></div>	コード・フラグメントをその他の本文と区別します。
青のアウトライン	オンラインで表示したときのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側を選択すると、参照先オブジェクトにジャンプします。
{ }	構文の記述行の場合、中括弧 { } で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。
[]	構文の記述行の場合、大括弧 [] で囲まれた部分は、オプションのパラメーターです。
...	構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、 <code>option[,...]</code> は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。
¥	本書では、ディレクトリー・パスの区切り記号として円記号 (¥) を使用します。UNIX(R) システムの場合には、円記号 (¥) をスラッシュ (/) に置き換えてください。すべての IBM WebSphere Business Integration Server Express のパス名は、ご使用のシステムにおいてこの製品がインストールされているディレクトリーを基準とした相対パスです。
<i>ProductDir</i>	製品のインストール先ディレクトリーを表します。

本リリースの新機能

リリース 4.3.1 の新機能

本書の最初のリリースです。リリース 4.3.1 には、以下のオペレーティング・システムに対する実動モードでのサポートがあります。

- IBM OS/400 V5R2、V5R3
- Red Hat Enterprise Linux AS 3.0 (Update 1 を適用)
- SuSE Linux Enterprise Server 8.1 SP3
- Microsoft Windows 2003

第 1 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール -- 概要

IBM WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 製品には、Launchpad と呼ばれるグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) ベースのセットアップ・プログラムが付属しています。Launchpad は、前提条件および製品ソフトウェアのインストールと構成の方法を段階的にガイドします。

本書では、インストールおよび構成プロセスの各ステップを詳細に説明します。ステップは、以下の順序で実行する必要があります。

1. Launchpad の基本操作を学習します。基本操作には、始動方法、停止方法、およびこのツールを使用した製品「クイック・スタート・ガイド」の表示方法があります。3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示』を参照してください。
2. 必要なソフトウェア前提条件がインストールされていることを確認し、希望に応じて前提条件を選択してインストールし、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus 製品をインストールします。7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』を参照してください。
3. システムを始動して、管理します。33 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』を参照してください。
4. オプションで、提供されている System Test というサンプルを使用して、システムが正しくインストールされ、正常に動作することを検証します。37 ページの『第 5 章 インストールの検証』を参照してください。
5. オプションで、Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールします。39 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』を参照してください。
6. オプションで、Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールします。45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』を参照してください。

本書のその他の章では、以下について説明します。

- 51 ページの『第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成』
- 59 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』
- 69 ページの『付録 A. ハードウェア要件とソフトウェア要件の適合』
- 75 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』

各章 (付録を除く) の最後には、「次のステップに進む」というセクションがあります。このセクションでは、インストール・プロセスのどの段階にいるか、およびどの製品をインストールするかに基づいて、次に進む章を示します。

次のステップに進む

インストールおよび構成のプロセスを開始するには、3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示』に進んで、Launchpad の基本機能を学習します。

第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示

Launchpad GUI を使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールおよび構成を行うには、Launchpad の始動および停止ができなければなりません。また、システムが正しくインストールされ、正常に動作することを検証する手順を実行するには、製品の「クイック・スタート・ガイド」も表示できなければなりません。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『Launchpad の始動』
- 6 ページの『Launchpad の停止』
- 6 ページの『Launchpad から製品の「クイック・スタート・ガイド」を表示する』
- 6 ページの『次のステップに進む』

Launchpad の始動

Launchpad を始動する前に、以下の作業を行います。

- ご使用のシステムが、セクション 69 ページの『ハードウェア要件の確認』にリストされたハードウェア要件を満たしていることを確認します。
- 73 ページの『ユーザー・アカウントの作成』の指示に従って、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus 用のユーザーを作成します。
- 製品に有効なフィックスパックがあるかどうかを、次のサイトで確認します。
<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>
- 製品をインストールするマシンでの root ユーザー特権を持っていることを確認します。この要件が満たされない場合は、この問題を示すエラー・メッセージが表示され、Launchpad プログラムは強制終了します。
- 本書におけるインストールの指示は、製品 CD からのインストールを想定しています。パスポート・アドバンテージによって取得した ESD からインストールする場合は、以下の作業を行います。
 - ダウンロード手順については、使用するパスポート・アドバンテージの情報を参照してください。
 - 適切なインストーラー機能を保証するため、すべての ESD をファイル・システム上の同一ディレクトリーに抽出して、マシンからインストールします。ESD イメージを基にして CD を作成して、その CD からインストールするようなことはしないでください。そのようにした場合、一部のソフトウェア前提条件の構成ユーティリティーは、実際的前提条件ソフトウェアが含まれている ESD にパッケージされないため、インストールに失敗する可能性があります。

- ファイルを `untar` するユーザーは、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールするユーザーと同じユーザーになるようにします。これらの作業を別のユーザーが実行すると、製品のインストーラーは正しく動作しません。

Launchpad を起動するには、以下の作業を行います。

1. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の基本コンポーネントが収録されている CD をコンピューターに挿入します。
2. CD-ROM ドライブを次のようにマウントします。
 - Red Hat Linux システム
`mount /dev/cdrom /mnt/cdrom`
 - SuSE Linux システム
`mount /dev/cdrom /media/cdrom`
3. 次のコマンドを実行して、Launchpad を始動します。
 - Red Hat Linux システム
`/mnt/cdrom/start_launchpad.sh`
 - SuSE Linux システム
`/media/cdrom/start_launchpad.sh`

Launchpad の「ようこそ」画面が表示されます。

要確認: これ以降、本書では、*mount_point* という用語を使用して、Red Hat Linux システムのパス `/mnt/cdrom`、または SuSE Linux システムのパス `/media/cdrom` を表します。

「ようこそ」画面の左側のボタンを使用すれば、いくつかのタスクを即時に選択できます。WebSphere Business Integration Server Express 製品の Launchpad の「ようこそ」画面は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品とは少し異なります。WebSphere Business Integration Server Express 製品の Launchpad の「ようこそ」画面を以下に示します。



図1. WebSphere Business Integration Server Express Launchpad の「ようこそ」画面

この画面のボタンは、以下のタスクを制御します。

製品のインストール

インストールする製品コンポーネントに基づいて、適切なソフトウェア前提条件をインストールするようユーザーをガイドし、さらに製品コンポーネントもインストールします。

最初のステップ

「クイック・スタート・ガイド」を起動します。

終了 Launchpad を停止します。

WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品の Launchpad の「ようこそ」画面を以下に示します。Express Plus バージョンには「**Capacity Pack のインストール**」という追加のボタンがある点に注目してください。このボタンを使用すれば、Adapter Capacity Pack および Collaboration Capacity Pack のインストーラーを起動できます。Adapter Capacity Pack および Collaboration Capacity Pack のインストール手順については、39 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』および 45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』で説明します。



図2. WebSphere Business Integration Server Express Plus Launchpad の「ようこそ」画面

Launchpad の停止

Launchpad を終了するには、「終了」というラベルの Launchpad ボタンを選択します。

Launchpad から製品の「クイック・スタート・ガイド」を表示する

Launchpad には、製品の「クイック・スタート・ガイド」を迅速かつ容易に表示する手段があります。この文書を表示するには、「最初のステップ」というラベルの Launchpad ボタンを選択します。

次のステップに進む

この章で概説した Launchpad GUI の基本操作を実行できるようになったら、7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』に進みます。ここでは、Launchpad を使用して、必要な前提条件を識別し、選択された前提条件をインストールして、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールする方法について説明します。

第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムは、インストールする予定のコンポーネントに基づいて、インストールに必要な前提条件ソフトウェアを決定します。Launchpad は、必要な前提条件ソフトウェアがマシンにインストールされているかを確認します。特定の項目がインストールされていない場合は、それらの項目をインストールできます。

次に Launchpad は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールをガイドする GUI インストーラーを起動します。製品をアンインストールする場合は、別の GUI が使用可能です。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章の全セクションを通して、インストールの説明では以下の事項を想定しています。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus v4.3.1 は、まだマシンにインストールされていません。WebSphere Business Integration Server Express v4.3.1 がインストール済みで、WebSphere Business Integration Server Express Plus v4.3.1 にアップグレードしたい場合は、59 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』の説明を参照してください。
- コンポーネントは、サポートされる Linux バージョンが実稼働環境で稼働しているマシン上にインストールされます。実稼働環境の Linux の各バージョンでサポートされている製品コンポーネントのリストについては、70 ページの表 4 を参照してください。開発環境の Linux バージョンでは、サポートされているコンポーネントはありません。
- Linux プラットフォームではサポートされないが、InterChange Server Express の管理に必要となるコンポーネント (Toolset Express for Windows の一部である System Manager ツールなど) は、リモートの Windows マシン上にインストールされ、到達可能になります。これを行うには、「*WebSphere Business Integration Server Express システム・インストール・ガイド (Windows 版)*」のインストールおよび構成の手順に従います。
- インストールは、WebSphere Business Integration Server Express Plus システムに関するものです。WebSphere Business Integration Server Express システムをインストールする場合は、表示される画面が少し異なります。
- 読者は、3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示』の情報を読んで理解し、Launchpad を起動済みであるとします。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 8 ページの『必要なソフトウェア前提条件の識別』
- 13 ページの『選択されたソフトウェア前提条件のインストール』

- 22 ページの『GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のインストール』
- 30 ページの『GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のアンインストール』
- 31 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、75 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

必要なソフトウェア前提条件の識別

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムは、インストールする予定のコンポーネントに基づいて、インストールに必要な前提条件ソフトウェアを決定します。選択可能なコンポーネントの詳細は、26 ページの『インストールする WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus コンポーネントの決定』のセクションを参照してください。GUI 画面上の特定エントリーの隣には、ヘルプ・アイコンがあります。アイコンを選択すると、その機能や、その機能に必要な前提条件についての関連情報を示すウィンドウが開きます。

どのコンポーネントをインストールするかをシステムに伝えるには、以下のステップを実行します。

1. 「製品のインストール」というラベルの Launchpad ボタンを選択します。「ユーザーの選択」画面が表示されます。

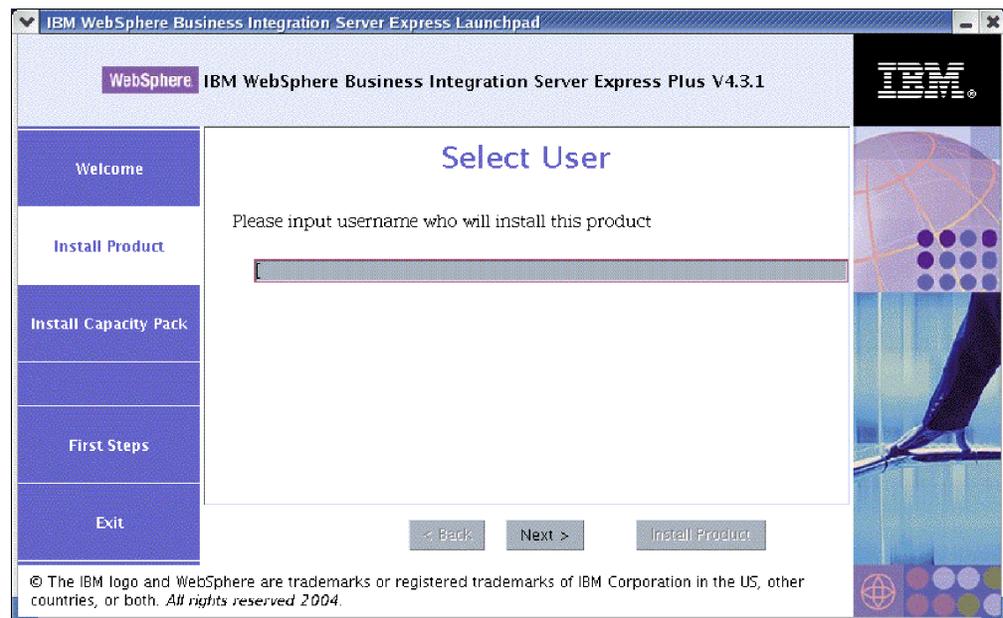


図 3. 「ユーザーの選択」画面

2. 「ユーザーの選択」画面で、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールするユーザーの名前（73 ページの『ユーザー・

アカウントの作成』の手順に従って作成したユーザー名) を入力して、「次へ」を選択します。「サーバーのインストール」画面が表示されます。

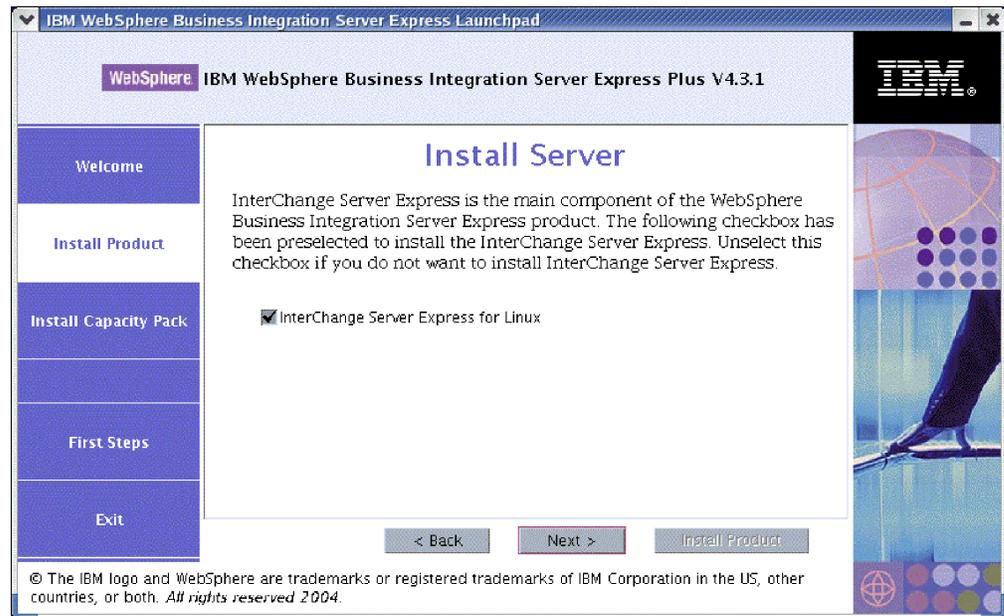


図4. 「サーバーのインストール」画面

3. 「サーバーのインストール」画面で、エントリー「**InterChange Server Express for Linux**」の横のチェック・ボックスがデフォルトで選択されています。以下のいずれかを実行します。
 - InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合は、「次へ」を選択します。
 - InterChange Server Express コンポーネントをインストールしない場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「次へ」を選択します。「ツールのインストール」画面が表示されます。

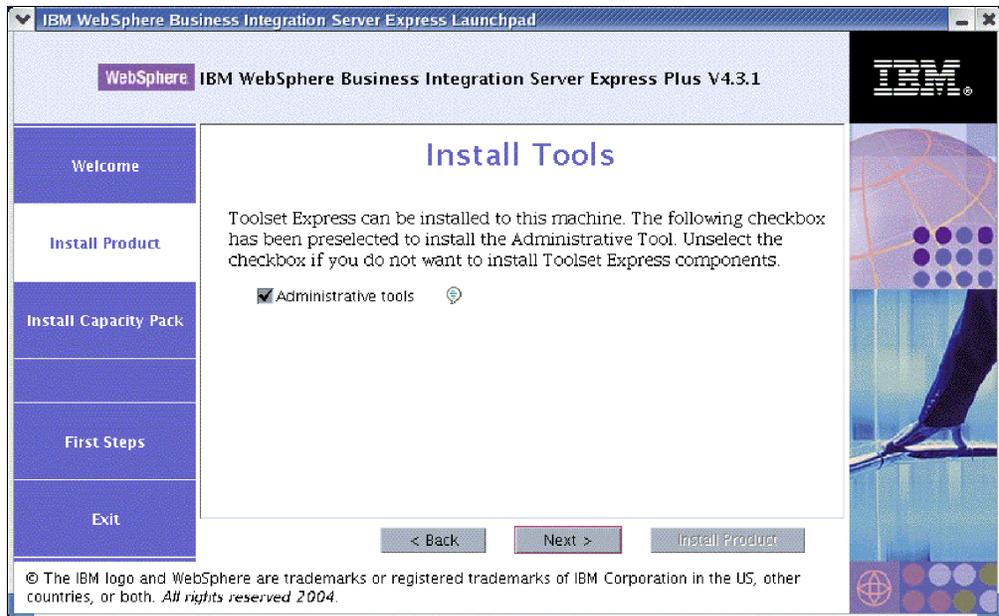


図5. 「ツールのインストール」画面

4. 「ツールのインストール」画面で、エントリー「管理ツール」の横のチェック・ボックスがデフォルトで選択されています。以下のいずれかを実行します。
 - 管理ツールをインストールする場合は、「次へ」を選択します。
 - 管理ツールをインストールしない場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「次へ」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。

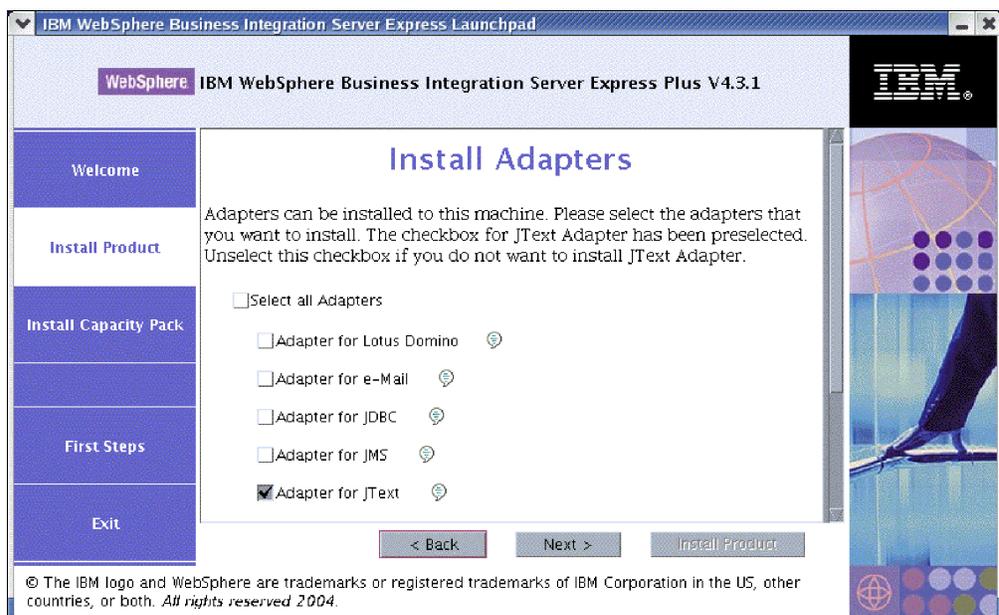


図6. 「アダプターのインストール」画面

5. 「アダプターのインストール」画面で、以下のいずれかを実行します。

- すべてのアダプターをインストールするには、「アダプターをすべて選択」エントリーの横のチェック・ボックスを選択して、「次へ」を選択します。
- アダプターを選択してインストールするには、各アダプターの横のチェック・ボックスを個別に選択して、「次へ」を選択します。
- アダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」エントリーの横のチェック・ボックスを選択解除して、「次へ」を選択します。

注: Adapter for JText は、サンプル・コンポーネントの一部である System Test サンプルの実行に必要なため、デフォルトで選択されています。(サンプル・コンポーネントは、ステップ 6 で説明するように、「サンプルのインストール」画面から選択できます。)

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

要確認: アダプターは、必要な数だけインストールできます。ただし、InterChange Server Express に登録できるアダプター数は、WebSphere Business Integration Server Express をインストールする場合で最大 3 つ、WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールする場合で最大 5 つ までです。

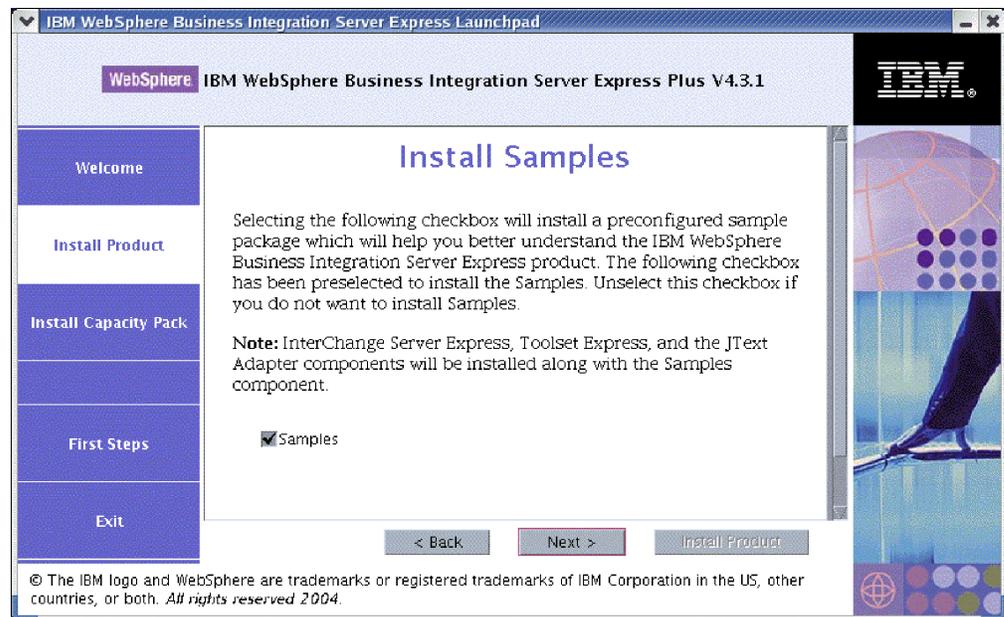


図7. 「サンプルのインストール」画面

6. 「サンプルのインストール」画面で、エントリー「サンプル」の横のチェック・ボックスがデフォルトで選択されています。以下のいずれかを実行します。
 - サンプル・コンポーネントをインストールする場合は、「次へ」を選択します。

注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、

InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

- サンプル・コンポーネントをインストールしない場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「次へ」を選択します。

「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

前のステップで選択した内容から、Launchpad は、インストールするコンポーネントに必要なソフトウェア前提条件を決定し、その中の一部または全部がシステムにインストール済みかどうかを識別して、その分析結果を「ソフトウェア前提条件」画面にポストします。この画面にはユーザーのシステムに固有のリストが表示されますが、そのリストには、どの WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのインストールを選択したかに応じて、以下のエントリーの一部または全部が含まれます。

- データベース (サポートされる 2 つのうちの 1 つ)
- IBM WebSphere Application Server - Express V5.1
- IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 以上の CSD レベル
- IBM Java Development Kit 1.3.1_07

Launchpad には、各前提条件のインストール状況が表示されます。状況値としては、「未インストール」、「オプション」、または「OK」があります。また、データベース選択に関してのみ、「未構成」があります。

WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品の Launchpad で表示される「ソフトウェア前提条件」画面の例を以下に示します。この画面の例は、IBM Java Development Kit 1.3.1_07 と IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 のみインストール済みであることを Launchpad が検出したときの結果を示しています。

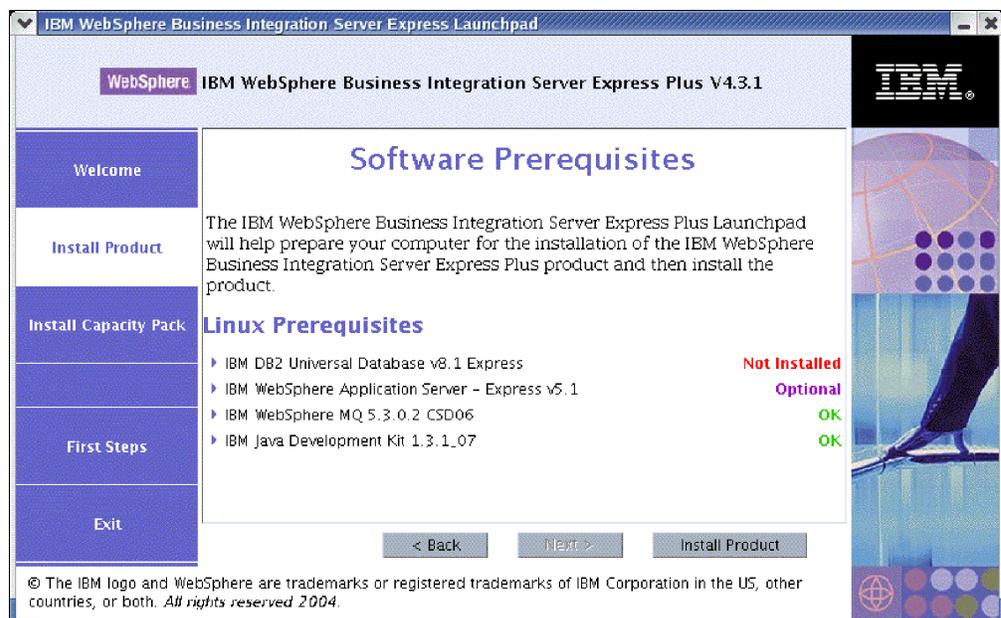


図 8. 選択された前提条件をインストールする前の「ソフトウェア前提条件」画面

システムに必要なソフトウェア・プログラムの状況が「未インストール」または「オプション」の場合は、Launchpad を使用してそのプログラムをインストールできます。データベースがインストール済みで、その状況が「未構成」の場合は、Launchpad を使用してデータベースを構成できます。各前提条件に関連して Launchpad が実行できるタスクについての詳細は、『選択されたソフトウェア前提条件のインストール』を参照してください。

選択されたソフトウェア前提条件のインストール

どの前提条件がシステムに必要なかは、Launchpad によって決定されました。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする予定の場合は、リポジトリ（インストールされたコンポーネントのメタデータを格納する）を保持するデータベースが必要です。Launchpad は、サポートされるデータベースを自動的にインストールして構成することも、サポートされる既存のデータベースを構成することもできます。詳細については、14 ページの『データベースのインストールおよび構成』を参照してください。
- System Monitor または Failed Event Manager (Administrative Toolset Express のコンポーネントとしてインストールされる) を使用する予定の場合は、Web アプリケーション・サーバーをインストールする必要があります。Launchpad は、WebSphere Application Server Express v5.1 を自動インストールできます。詳しくは、18 ページの『WebSphere Application Server Express のインストール』を参照してください。他の Web アプリケーション・サーバーもサポートされています。

要確認: Express または Express Plus 製品、および WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server とともに使用できるように System Monitor や Failed Event Manager を構成する作業を WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストーラーが自動的に行うようにしたい場合は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストーラーを実行する前に、サポートされているいずれかのバージョンの WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server をインストールしておく必要があります。そうしないと、51 ページの『第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成』で説明するように、System Monitor および Failed Event Manager を手動で構成しなければなりません。Web アプリケーション・サーバーとして Tomcat を使用している場合は、手動で構成する必要があります。詳しくは、51 ページの『第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成』を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストーラーが実行する自動構成では、IBM HTTP Server などの Web サーバーはインストールされていないことが前提となっています。結果のデフォルト URL は、次のとおりです。

- System Monitor: <http://hostname:7089/ICSMonitor>
- Failed Event Manager: <http://hostname:7089/FailedEvents>

- WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus をインストールする場合は必ず WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 以上の CSD レベルをインストールする必要があります。ただし、サーバーとクライアントの両方をインストールする必要があるか、クライアントのみでよいかは、インストールする予定の WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントによって決まります。Launchpad は、このソフトウェアを自動インストールできます。詳しくは、19 ページの『WebSphere MQ のインストール』を参照してください。
- コラボレーションおよびマッピング開発を実行する予定の場合は、IBM Java Development Kit 1.3.1_07 前提条件をインストールしておく必要があります。Launchpad は、このソフトウェアを自動インストールできます。詳しくは、20 ページの『Java Development Kit のインストール』を参照してください。
- System Monitor または Failed Event Manager (Administrative Toolset Express のコンポーネントとしてインストールされる) を使用する予定の場合は、Windows プラットフォームで稼働するリモートのマシン上に Web ブラウザーをインストールする必要があります。詳細については、21 ページの『リモート・マシンへの Web ブラウザーのインストール』を参照してください。

すべての必須ソフトウェアに関する完全な表が、セクション 69 ページの『ソフトウェア要件の確認』にあります。前提条件の製品の適切なバージョンを以前にインストールした場合は、Launchpad によるそれらの再インストールは不要である可能性があります。特定のソフトウェアの構成に関する指示を確認してください。

データベースのインストールおよび構成

IBM WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus では、IBM DB2(R) Universal Database(TM) v8.1 Express フィックスパック 5 以上、および IBM DB2 Universal Database v8.1 Enterprise フィックスパック 2 以上がサポートされます。データベースをインストールまたは構成する前に、以下の作業を行います。

- 新規データベースの作成および新規ユーザーの追加を行うための管理者特権があることを確認します。
- セクション 72 ページの『データベースの最小必要要件の確認』にある、データベースの最小必要要件に目を通します。

データベースが必要かどうか、および、データベースが必要な場合はデータベースのインストールや構成が適切に完了しているかどうかは、Launchpad によってすでに決定されています。データベース要件の条件に関する情報を取得するには、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、エントリ「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express**」を展開します。画面のこの領域には、Launchpad がマシン上で何を検出したかについての説明があります。
2. Launchpad がマシン上でどのソフトウェアを検出したかに応じて、以下のいずれかを実行します。
 - サポートされるデータベースがインストールされていない場合は、IBM DB2 Universal Database v8.1 Express のインストールを起動するためのボタンが表

示されます。この場合は、セクション『IBM DB2 Universal Database v8.1 Express の新規インストールのインストールおよび構成』の説明に従ってください。

- IBM DB2 Universal Database v8.1 Express はインストール済みだが、必要なフィックスパックのレベルにアップグレードされていない場合は、フィックスパック 5 をインストールに適用するためのボタンが表示されます。この場合は、16 ページの『IBM DB2 Universal Database v8.1 Express の既存インストールのフィックスパック・レベルの更新』のセクションの説明に従ってください。
- IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise がインストール済みで、フィックスパックのレベルも適切な場合は、既存インストールの構成を起動するためのボタンが表示されます。この場合は、17 ページの『IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise の既存インストールの構成』のセクションの説明に従ってください。

IBM DB2 Universal Database v8.1 Express の新規インストールのインストールおよび構成

サポートされるデータベースがマシンにインストールされていない場合、あるいは、サポートされる別のデータベースがすでにインストール済みかどうかにかかわらず IBM DB2 Universal Database v8.1 Express をインストールして構成したい場合は、このセクションの説明に従ってください。

このセクションでのインストールの説明は、今回初めて DB2 UDB Express をマシンにインストールすることを想定しています。Launchpad を通じて以前に DB2 UDB Express がインストールされていたが、標準の DB2 アンインストール手順に従ってすでにアンインストール済みで、これから Launchpad を使用して再インストールしようとする場合は、Launchpad を使用して DB2 UDB Express を再インストールする前に、まず以下の作業を行う必要があります。

- Launchpad が最初の DB2 UDB Express インストールを実行したときに自動作成され、現在残っている 4 つのユーザー ID を手動で削除します。これらの ID を削除するには、以下のコマンドを入力します。

```
userdel db2inst1 -r
userdel dasusr1 -r
userdel db2fenc1 -r
userdel smbadm -r
```

- /etc/services ファイルから、次の DB2 サービス・ポート行を削除します。
db2c_db2inst1 50001/tcp
- /tmp ディレクトリーに存在するファイル serverexp または OptionFile_DB2.txt のコピーを手動で削除します。
- DB2 別名が格納されているディレクトリーに、以前の DB2 インストールからの SMB_DB 別名が含まれていないことを確認します。

IBM DB2 UDB Express をインストールするには、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、エントリー「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express**」を、まだ展開していない場合は展開します。画面のこの領域には、Launchpad がマシン上で何を検出したかについての説明があります。

2. 「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express のインストール (Install IBM DB2 Universal Database v8.1 Express)**」というラベルのボタンを選択します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。

要確認: 「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express**」の下の強調表示された領域内にある「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express のインストール (Install IBM DB2 Universal Database v8.1 Express)**」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「**製品のインストール**」というラベルのボタンではありません。

3. IBM DB2 UDB Express が収録されている CD をマシンに挿入して、「**OK**」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。)

データベースのサイレント・インストールが開始します。インストールが完了すると、ダイアログによって完了が通知され、2 番目の DB2 CD (フィックスパック 5 が収録されている) を挿入するよう促されます。

注: IBM DB2 Express は、デフォルトでディレクトリー /opt/IBM/db2/V8.1/ にインストールされます。

4. フィックスパック 5 が収録されている CD をマシンに挿入して、「**OK**」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。)フィックスパック 5 のサイレント・インストールおよびデータベースの構成が開始します。

フィックスパック 5 のサイレント・インストールおよびデータベースの構成が完了したら、Launchpad の DB2 の状況が「**未インストール**」から「**OK**」に変化したことを確認してください。

インストールおよび構成のプロセスでは、以下の処理が行われます。

- 次の DB2 ユーザーが作成されます。
 - db2inst1
 - db2fenc1
 - dasusr1
- ユーザー名が smbadmin、パスワードが smbP4\$\$word のユーザーが作成されます。
- SMB_DB という名前のデータベースが作成されます。
- SMB_DB 表の smbadmin ユーザーに適切な権限が付与されます。

IBM DB2 Universal Database v8.1 Express の既存インストールのフィックスパック・レベルの更新

フィックスパック 5 が未適用の IBM DB2 v8.1 Express の既存インストールが検出された場合、Launchpad はそのソフトウェアの自動パッチを提案します。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、エントリー「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express**」を、まだ展開していない場合は展開します。画面のこの領域には、Launchpad がマシン上で何を検出したかについての説明があります。
2. 「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express**」の下の領域で、「**Fixpack5 の適用**」というラベルのボタンを選択します。パッチのサイレント・インストールおよびデータベースの構成が実行され、Launchpad のソフトウェア状況が「**OK**」に変化します。

パッチおよび構成のプロセスでは、以下の処理が行われます。

- 次の DB2 ユーザーが作成されます。
 - db2inst1
 - db2fenc1
 - dasusr1
- ユーザー名が `smbadmin`、パスワードが `smbP4$$word` のユーザーが作成されます。
- `SMB_DB` という名前のデータベースが作成されます。
- `SMB_DB` 表の `smbadmin` ユーザーに適切な権限が付与されます。

IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise の既存インストールの構成

IBM DB2 Universal Database v8.1 Express または Enterprise がインストール済みで、それを WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus とともに使用できるように構成したい場合は、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、エントリー「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express**」を、まだ展開していない場合は展開します。画面のこの領域には、Launchpad がマシン上で何を検出したかについての説明があります。
2. 「**IBM DB2 Universal Database v8.1 Express**」の下の領域で、「**継続**」というラベルのボタンを選択します。

注: DB2 システムに複数のインスタンスがある場合は、ドロップダウン・ボックスが表示されます。この場合、InterChange Server Express によって使用されるデータベースを作成したいインスタンスを選択します。

IBM DB2 Universal Database v8.1 が正常に構成されると、データベース構成が完了したというメッセージが表示されます。構成プロセスでは、以下の処理が行われます。

- ユーザー名が `smbadmin`、パスワードが `smbP4$$word` のユーザーが作成されます。
- `SMB_DB` という名前のデータベースが作成されます。
- `SMB_DB` 表の `smbadmin` ユーザーに適切な権限が付与されます。

ヒント: DB2 Enterprise を使用している場合は、マシンを再始動してもデータベース・マネージャーは再始動しません。データベース・マネージャーが稼働

していないので、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール中にマシンを再始動した場合、次の 2 つの問題が発生します。

- リポジトリの作成に失敗する可能性があります。この問題によってリポジトリ作成が失敗すると、インストーラーのログには、「start database manager コマンドが発行されていません (No start database manager command was issued)」というメッセージ行が組み込まれます。
- InterChange Server Express の始動に失敗する可能性があります。これは、DB マネージャーが稼働していないので、InterChange Server Express が SMB_DB に接続できないためです。この障害が発生すると、InterchangeSystem.log ファイル・メッセージには、「start database manager コマンドが発行されていません (No start database manager command was issued)」という行が組み込まれます。

上記のどちらの問題も、以下のステップに従うことによって対処できます。

1. DB2 コントロール・センターを開きます。
2. 「全カタログ・システム (All Cataloged Systems)」フォルダーを展開し、次に使用ホストのフォルダーを展開してから、「インスタンス」フォルダーを展開します。
3. 「インスタンス」フォルダー内の「DB2」アイコンを右マウス・ボタンでクリックして、「開始」を選択します。DB2 メッセージ「DB2START 処理は正常に実行されました (DB2START processing was successful)」が表示されます。

上記のステップを実行したら、リポジトリを作成して、InterChange Server Express を開始できます。

WebSphere Application Server Express のインストール

この前提条件は、Toolset Express のコンポーネント System Monitor および Failed Event Manager をインストールする場合に必要になります。このどちらのコンポーネントにも、サーブレット・エンジンを持つ Web アプリケーション・サーバーが必要です。WebSphere Application Server バージョン 5.0.2 または 5.1、WebSphere Application Server Express バージョン 5.0.2 または 5.1、Tomcat バージョン 4.1.24 または 4.1.27 のいずれかがすでにインストール済みであれば、この前提条件が満たされます。

IBM WebSphere Application Server Express をインストールするには、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「IBM WebSphere Application Server - Express V5.1」を、まだ展開していない場合は展開します。
2. 「インストール」を選択して、IBM WebSphere Application Server Express V5.1 のサイレント・インストールを開始します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。

要確認: 「IBM WebSphere Application Server - Express V5.1」の下の強調表示された領域内にある「インストール」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

3. *WebSphere Application Server - Express V5.1 Components Disk 1* というラベルの CD をマシンに挿入して、「OK」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。)サイレント・インストールが開始します。

注:

- a. WebSphere Application Server Express は、デフォルトでディレクトリー /opt/IBM/WebSphere/Express51 にインストールされます。
 - b. *WebSphere Application Server - Express V5.1 Components Disk 2* というラベルの CD の挿入は要求されません。この CD には、WebSphere Studio Site Developer ツールが収録されています。Launchpad では、このオプション・ツールは自動的にインストールされませんが、独立の製品として手動でインストールすることはできます。インストールの説明については、57 ページの『WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール』を参照してください。
4. WebSphere Application Server Express のサイレント・インストールが完了したら、Launchpad での状況が「オプション」から「OK」に変化したことを確認してください。

WebSphere MQ のインストール

WebSphere MQ メッセージング・ソフトウェアは、WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 製品を実行するために必要です。サーバーとクライアントの両方のコンポーネントが必要か、クライアント・コンポーネントのみ必要かは、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のどのコンポーネントをインストールするかによって決まります。

- InterChange Server Express コンポーネントをインストールする予定の場合は、WebSphere MQ サーバーおよびクライアントをインストールする必要があります。サーバーとクライアントをインストールすると、InterChange Server Express とコネクタの間の通信が可能になります。
- アダプターのみをインストールする予定の場合は、WebSphere MQ クライアントのみインストールする必要があります。

サーバーとクライアントが必要か、クライアントのみ必要かは、Launchpad によってすでに決定されていて、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面には次のいずれかのエントリーが表示されます。

- IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 サーバーおよびクライアントをインストールする必要がある場合は、エントリー「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」が表示されます。
- IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 クライアントのみインストールする必要がある場合は、エントリー「**IBM WebSphere MQ クライアント 5.3.0.2 CSD06**」が表示されます。

IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 サーバーおよびクライアント、またはクライアントのみをインストールするには、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」または「**IBM WebSphere MQ クライアント 5.3.0.2 CSD06**」（どちらかシステムに表示された方）を展開します。
2. 「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 サーバーおよびクライアントをインストールします (101 MB)**」または「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 クライアントのみをインストールします (16 MB)**」の横のラジオ・ボタンが選択されていることを確認します。
3. 「インストール」を選択して、IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 のサイレント・インストールを開始します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。

要確認: 「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」または「**IBM WebSphere MQ クライアント 5.3.0.2 CSD06**」の下の強調表示された領域内にある「インストール」というラベルのボタンを選択してください。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

4. IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 が収録されている CD をマシンに挿入して、「**OK**」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。)WebSphere MQ のサイレント・インストールが開始します。

注: WebSphere MQ は、デフォルトでディレクトリー /opt/mqm にインストールされます。

5. WebSphere MQ のサイレント・インストールが完了したら、Launchpad での状況が「未インストール」から「**OK**」に変化したことを確認してください。

注: WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 ソフトウェアには、ソフトウェアおよびネットワークに関する独自の前提条件があります。これらの前提条件が満たされないと、この製品のサイレント・インストールは失敗します。詳しくは、WebSphere MQ の文書を参照してください。

CSD06 が未適用の WebSphere MQ 5.3.0.2 の既存インストールが検出された場合、Launchpad はそのソフトウェアの自動パッチを提案します。この場合は、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面の選択項目「**IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06**」または「**IBM WebSphere MQ クライアント 5.3.0.2 CSD06**」を展開するときに、「**CSD06 の適用**」を選択できます。パッチのサイレント・インストールが実行され、Launchpad のソフトウェア状況が「**OK**」に変化します。

Java Development Kit のインストール

IBM Java Development Kit 1.3.1_07 は、コラボレーションおよびマッピング開発を実行するのに必要です。

注: コラボレーションおよびマッピング開発の実行には、C++ コンパイラーも必要です。C++ コンパイラーのパスは、PATH 変数に設定しておく必要があります。

す。このコンパイラーは、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus 製品には付属していません。

IBM Java Development Kit 1.3.1_07 をインストールするには、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**IBM Java Development Kit 1.3.1_07**」を展開します。
2. 「インストール」を選択します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。

要確認: 「**IBM Java Development Kit 1.3.1_07**」の下の強調表示された領域内にある「インストール」というラベルのボタンを選択します。画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンではありません。

3. IBM Java Development Kit 1.3.1_07 が収録されている CD をマシンに挿入して、「**OK**」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。)IBM Java Development Kit 1.3.1_07 のサイレント・インストールが開始します。

注: JDK は、デフォルトでディレクトリー /opt/IBMJava2-131/ にインストールされます。

4. IBM Java Development Kit 1.3.1_07 のサイレント・インストールが完了したら、Launchpad での状況が「未インストール」から「**OK**」に変化したことを確認してください。

リモート・マシンへの Web ブラウザーのインストール

Web ブラウザーは、Administrative Toolset Express のコンポーネント System Monitor および Failed Event Manager をインストールする場合に必要になります。このブラウザーは、Windows プラットフォームで稼働するリモート・マシン上に存在し、かつ到達可能でなければなりません。Windows 上でサポートされる Web ブラウザーとしては、Microsoft Internet Explorer 6 Service Pack 1 以降と Netscape Navigator 4.7x があります。

WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品の Launchpad で表示される「ソフトウェア前提条件」画面の例を以下に示します。この画面の例は、必要な前提条件がすべてインストール済みであることを Launchpad が検出したときの結果を示しています。

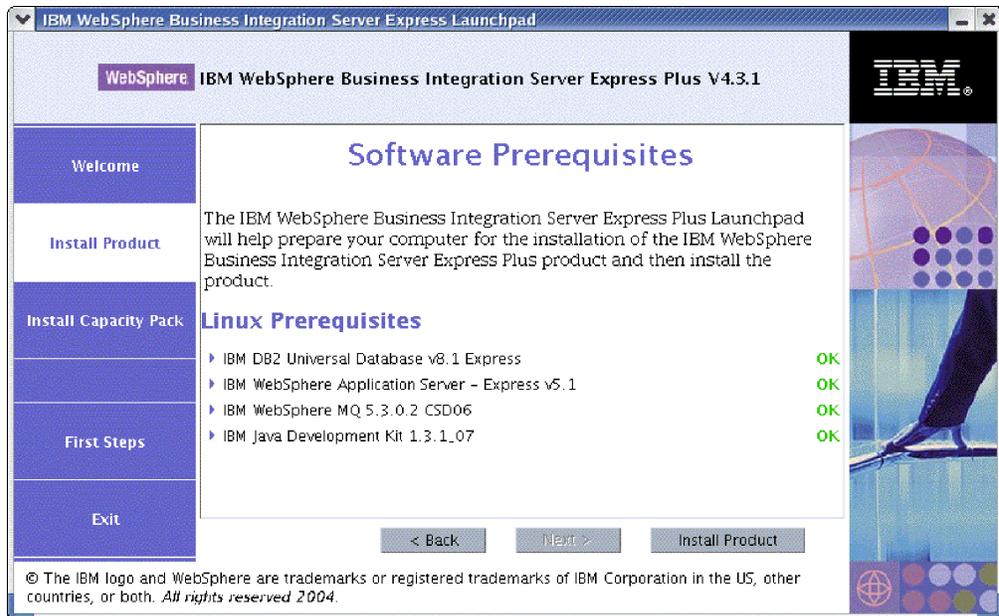


図9. 前提条件をインストールした後の「ソフトウェア前提条件」画面

GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のインストール

予定されたインストールに必要なソフトウェア前提条件の状況がいずれも「OK」であれば、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールに進むことができます。それには、以下の作業を行います。

1. Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面の下部にある「製品のインストール」というラベルのボタンを選択します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。
2. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の基本コンポーネントが収録されている CD をマシンに挿入して、「OK」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。)

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されず。

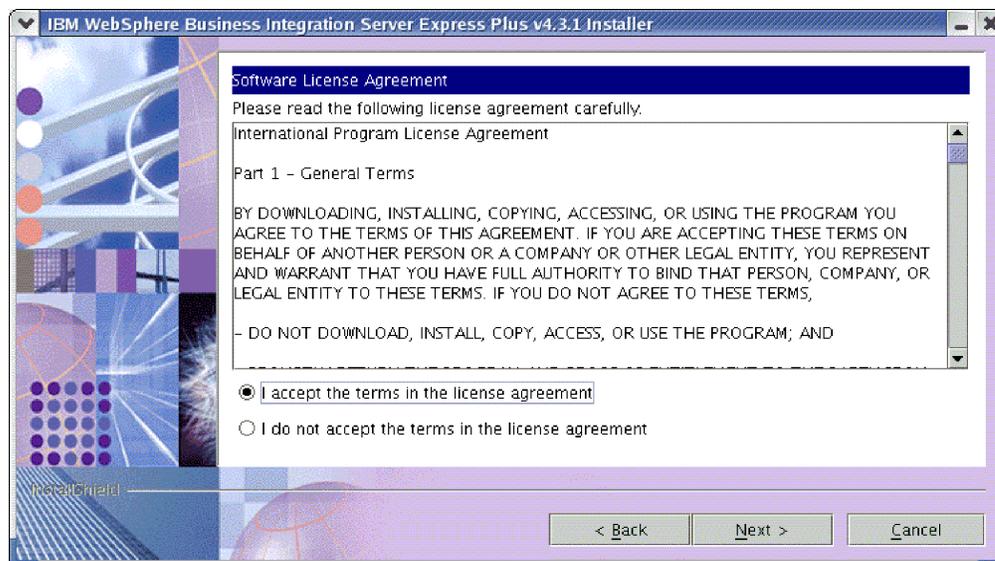


図 10. 「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面

3. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

「宛先」画面が表示されます。

注: 英語以外のロケールでインストーラーを実行している場合は、「英語」というラベルのボタンが「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面に表示されます。ソフトウェアご使用条件を英語で表示するには、このボタンを選択します。このボタンを選択すると、ボタンのテキストは、インストーラーに使用されていた英語以外の言語に変更されます。ソフトウェアご使用条件を、インストーラーに使用されている英語以外の言語で表示するには、このボタンをもう一度選択します。

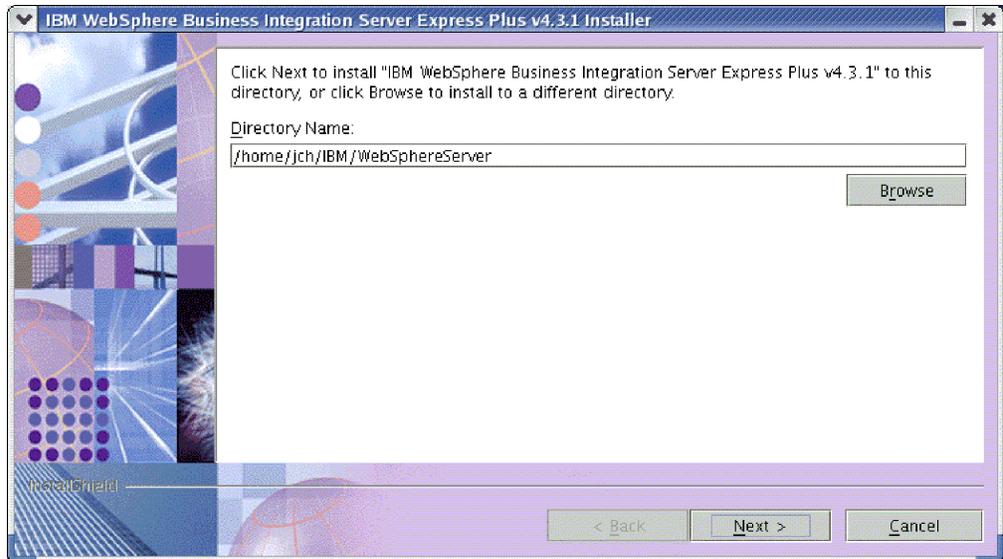


図 11. 「宛先」画面

4. 「宛先」画面で、デフォルトのインストール・ロケーション `Home_directory/IBM/WebSphereServer` (ここで `Home_directory` は、前の「ユーザーの選択」画面で識別されたユーザーのホーム・ディレクトリー) を受け入れるか、別のロケーションをブラウズして、「次へ」を選択します。

注: ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。本書では、インストール・ディレクトリー `Home_directory/IBM/WebSphereServer` は `ProductDir` と呼ばれます。

次のいずれかの処理が実行されます。

- InterChange Server Express コンポーネントのインストールを選択した場合、インストーラーは、適切な前提条件が存在し、正しく構成されていることを検査するとともに、InterChange Server Express コンポーネントをインストールするマシンに存在するプロセッサが 2 つ以下であることを確認します。
 - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
 - 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 6 (25 ページ) から手順を続行します。
- InterChange Server Express コンポーネントのインストールを選択しなかった場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。この場合、ステップ 5 (25 ページ) から手順を続行します。

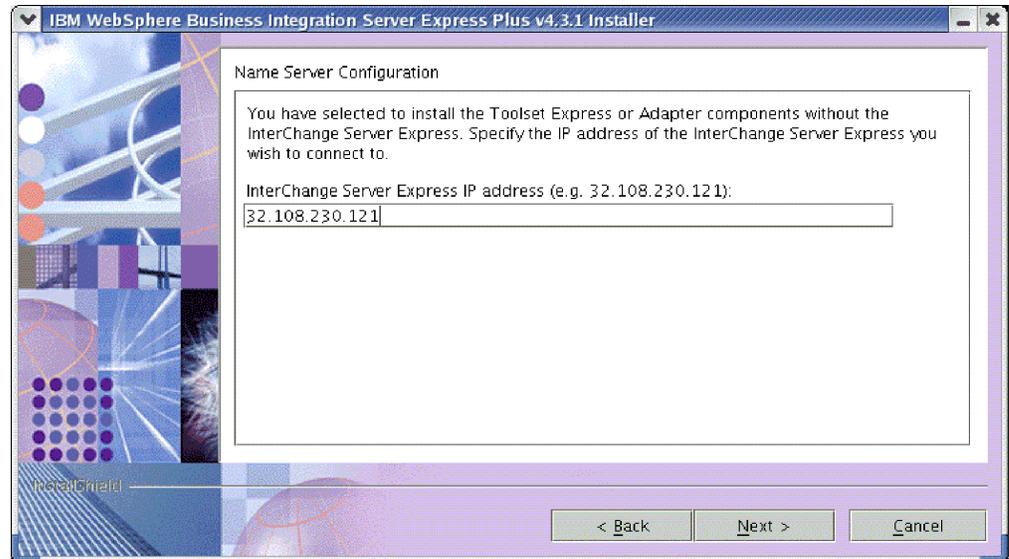


図 12. 「ネーム・サーバー構成」画面

5. 「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「次へ」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、28 ページの『ネーム・サーバーの構成』を参照してください。
6. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
 - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定されたファイル・システム上で不要なスペースをいくらか削除するか、あるいは「宛先」画面をもう一度表示してターゲット・ロケーション全体を変更する必要があります。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

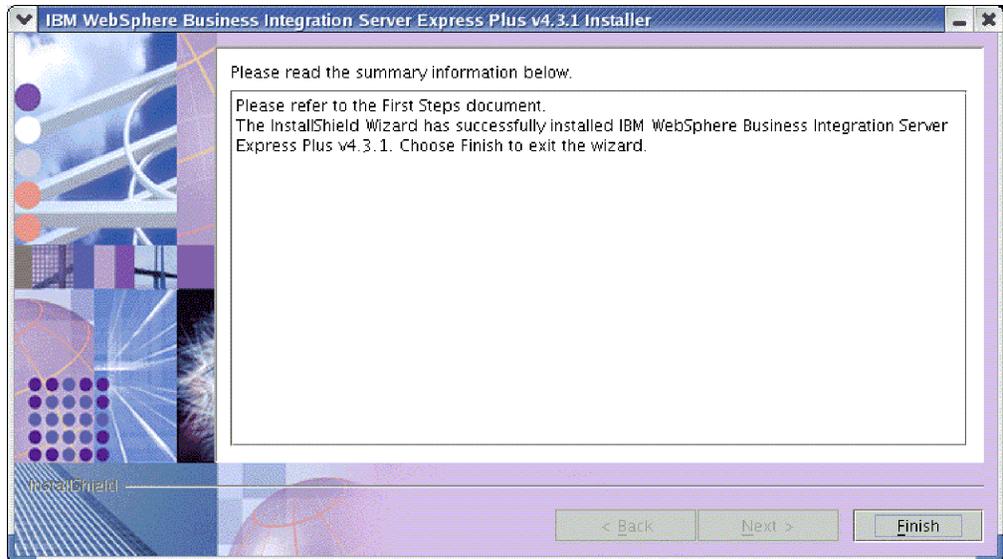


図 13. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面

インストール・プロセスでは、以下の処理が完了しました。

- 製品コンポーネントがインストールされました。
- InterChange Server Express が使用する InterchangeSystem.cfg ファイルが構成されました。
- WebSphere MQ のキュー・マネージャーが構成されました。
- LD_ASSUME_KERNEL という新規システム変数が /etc/profile ファイルに追加され、その値が 2.4.19 に設定されました。
- プラットフォーム固有の構成および登録が提供されました。
- コンテンツが InterChange Server Express に配置されました。

この時点で、28 ページの『WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のファイルとディレクトリーの表示』に示すシステムのファイルおよびディレクトリー構造を見ることができます。インストール・プロセスの詳細を示すログ・ファイル wbi_server_exp_install_log.txt は、*ProductDir* ディレクトリーにあります。

インストールする WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus コンポーネントの決定

WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus をインストールするときは、製品コンポーネントの全部または一部のサブセットをインストールできます。インストール可能なコンポーネントは、Launchpad の左側のパネルの「製品のインストール」ボタンを選択して表示される画面から、あるいはサイレント・インストール時に使用される応答ファイル内から選択できます。

サポートされるすべての Linux バージョンにおいて、インストールで選択可能なコンポーネントはまったく同じです。インストールされたコンポーネントに対するサポートは、それらのコンポーネントが実稼働環境で使用されるか、開発環境で使用

されるかによって異なります。実稼働環境および開発環境の各 Linux バージョンでサポートされる製品コンポーネントのリストについては、70 ページの表 4 を参照してください。

Linux システムへのインストール時に、以下のコンポーネントのセットから選択できます。

- InterChange Server Express コンポーネント
- Toolset Express コンポーネント。以下のサブコンポーネントが含まれます。
 - 管理ツール

管理ツールをインストールすることにより、以下のコンポーネントが得られます。

- System Monitor
- Failed Event Manager
- 次のリストから選択したアダプター・コンポーネント。アダプターは、必要な数だけインストールできます。ただし、InterChange Server Express に登録できるアダプター数は、WebSphere Business Integration Server Express をインストールする場合で最大 3 つ、WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールする場合で最大 5 つ までです。
 - Adapter for e-Mail
 - Adapter for iSeries
 - Adapter for JDBC
 - Adapter for JMS
 - Adapter for JText
 - Adapter for Lotus(R) Domino(R)
 - Adapter for SWIFT
 - Adapter for Web Services
 - Adapter for WebSphere MQ
 - Adapter for XML

注:

1. 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。
 - e-Mail アダプター
 - XML データ・ハンドラー
 - Adapter Framework
2. Adapter for COM、Adapter for Exchange、および Adapter for Portal Infranet 6.x は、Windows 2000 および Windows 2003 プラットフォームでのみサポートされます。ただし、これらの各アダプターは、Linux プラットフォームにインストールされた InterChange Server Express と通信する分散アダプターとして構成できます。分散アダプターの構成については、「システム・インプリメンテーション・ガイド」を参照してください。

- サンプル・コンポーネントは、System Test と呼ばれる構成済みのサンプルをインストールします。この System Test を実行すれば、インストールが正しく行われ、正常に動作するかを検証できます。詳しくは、37 ページの『第 5 章 インストールの検証』を参照してください。

InterChange Server Express および Toolset Express コンポーネントの詳細については「システム管理ガイド」、アダプターの詳細については個々のアダプター・ガイドを参照してください。すべての文書は、Web サイト <http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> で参照できます。

ネーム・サーバーの構成

Administrative Toolset Express コンポーネントまたはアダプターを、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントとは別のロケーションにインストールする場合、インストーラーはネーム・サーバーを構成する必要があります。このため、ユーザーは、InterChange Server Express を格納する (または格納する予定の) マシンの IP アドレスの入力を求められます。インストーラーは、インストール中に「ネーム・サーバー構成」画面に入力された IP アドレスからこの情報を取得し、それを使用して、ローカル・マシンの `ProductDir/bin/CWSharedEnv.sh` ファイルの `ORB_HOST` プロパティ値を設定します。

WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のファイルとディレクトリーの表示

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールが完了したら、結果のファイル・システムとその内容を表示できます。ディレクトリーは、デフォルトで `Home_directory/IBM/WebSphereServer` ディレクトリー (本書では `ProductDir` と呼ぶ) の下に配置されます。

注: `ProductDir` に表示される特定のファイルおよびディレクトリーは、インストール時に選択したコンポーネントによって異なります。実際のインストールのファイルおよびディレクトリーは、以下に示すものとは異なる場合があります。

表 1. Linux システムでの WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus インストールのディレクトリー構造

ディレクトリー名	内容
<ul style="list-style-type: none"> • <code>_uninstWBIServerExp</code> (WebSphere Business Integration Server Express インストール) • <code>_uninstWBIServerExpPlus</code> (WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール) 	このディレクトリーには、Java 仮想マシン (JVM)、および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の削除に使用する実行可能ファイルがあります。
<code>_uninstZip</code>	このディレクトリーには、インストール中に <code>unzip</code> されたすべてのファイルのリストがあります。
<code>bin</code>	このディレクトリーには、システムが使用する実行可能ファイルおよび <code>.sh</code> ファイルがあります。

表 1. Linux システムでの WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus インストールのディレクトリー構造 (続き)

ディレクトリー名	内容
collaborations	このディレクトリーには、インストールされたコラボレーションの .class ファイルやメッセージ・ファイルを格納するサブディレクトリーがあります。
connectors	このディレクトリーには、システムの各アダプターに固有のファイルがあります。アダプターがサポートするアプリケーションにインストールする必要があるアダプター固有ファイルもあります。
DataHandlers	このディレクトリーには、システムが使用するデータ・ハンドラーの .jar ファイルがあります。
DevelopmentKits	このディレクトリーには、開発者がさまざまなシステム・コンポーネントを作成する際に役立つサンプル・ファイルがあります。提供されるサンプルは、Server Access for EJB、Server Access for J2EE Connector Architecture、コネクター (C++ および Java)、および Object Discovery Agents です。
DLMs	このディレクトリーには、Dynamic Loadable Module (DLM)、および InterChange Server Express マップに関するその他のファイルを格納するサブディレクトリーがあります。
jre	このディレクトリーには、IBM Java ランタイム環境 (JRE) ファイルがあります。
legal	このディレクトリーにはライセンス・ファイルがあります。
lib	このディレクトリーにはシステム用の .jar ファイルがあります。
logs	このディレクトリーには、さまざまなログ・ファイルがあります。
messages	このディレクトリーには、生成されたメッセージ・ファイルがあります。
mqseries	このディレクトリーには WebSphere MQ 固有のファイル (一部実行可能ファイルを含む) があります。
ODA	このディレクトリーには、各エージェントのオブジェクト・ディスカバリー・エージェント.jar ファイルおよび .sh ファイルがあります。
repository	このディレクトリーには、システム・コンポーネントの定義があります。
Samples	このディレクトリーには、ベンチマーク・サンプル用のコンポーネント定義、およびコラボレーション用のサンプル・メール・ファイルがあります。
src	このディレクトリーには、相互参照用の Relationship Service API のサンプルがあります。
templates	このディレクトリーには、start_connName.sh ファイルがあります。
WBFEM	このディレクトリーには、Failed Event Manager ファイルがあります。
WBSM	このディレクトリーには、System Monitor ファイルがあります。

初期インストール後の追加コンポーネントのインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後に、追加コンポーネントをインストールすることができます。これを行うには、Launchpad の左側のパネルから「製品のインストール」ボタンを選択します。これにより Launchpad には、インストールするコンポーネントを選択する画面が表示されます（詳細は、8 ページの『必要なソフトウェア前提条件の識別』を参照）。特定の画面から一部のコンポーネントをすでにインストールした場合、選択画面は表示されますが、すでにインストールされたコンポーネントの横のチェック・ボックスは使用不可になります。

要確認: 追加コンポーネントをインストールするユーザーは、製品をインストールしたユーザーと同じでなければなりません。この 2 つの作業を同じユーザーが実行しないと、アクセス権の問題が発生することがあります。

Launchpad は、新規 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのインストールと同様に、追加ソフトウェア前提条件が必要かどうかを新規の選択内容に基づいて決定し、そのインストールをガイドします。

GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のアンインストール

IBM には、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストール全体を削除する、あるいは特定コンポーネントを選択して削除するアンインストール GUI プログラムがあります。

要確認: 製品をアンインストールするユーザーは、製品をインストールしたユーザーと同じでなければなりません。この 2 つの作業を同じユーザーが実行しないと、アクセス権の問題が発生することがあります。

アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. WebSphere Business Integration Server Express をインストールしたか Express Plus をインストールしたかに応じて、次のいずれかのコマンドを入力して、アンインストール GUI を起動します。
 - `ProductDir/_uninstWBIServerExp/uninstaller.bin` (WebSphere Business Integration Server Express システム)
 - `ProductDir/_uninstWBIServerExpPlus/uninstaller.bin` (WebSphere Business Integration Server Express Plus システム)

「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面が表示されます。

2. 「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面で、「次へ」をクリックします。

「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。

3. 「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面で、削除するコンポーネントを選択状態のままにして、「次へ」を選択します。

「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

4. 「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「次へ」を選択して、選択内容を確定します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。

「ポストアンインストールの終了 (Post-uninstallation Finish)」画面が表示されま
す。

5. 「ポストアンインストールの終了 (Post-uninstallation Finish)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

注: `Home_directory/IBM/WebSphereServer` ディレクトリーは、場合によっては手動
で削除する必要があります。

次のステップに進む

ソフトウェア前提条件や WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を正常にインストールしたら、33 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』に進みます。

最初に 33 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』、次に 37 ページの『第 5 章 インストールの検証』の順で指示に従えば、WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする予定の場合でも、基本システムが正しくインストールされ、正常に動作するかを、追加コンポーネントのインストール前に検証できます。

第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理

システムを始動するには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントを起動する必要があります。システムを効率的に管理するには、接続された Windows マシン上で System Manager ツールを起動して、InterChange Server Express を System Manager に登録する必要があります。System Manager は、Windows 2000 および Windows XP プラットフォームでのみサポートされます。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』
- 34 ページの『InterChange Server Express のセットアップ』
- 36 ページの『次のステップに進む』

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を始動するには、以下の作業を行います。

1. 次のコマンドを入力して、WebSphere MQ キュー・マネージャーおよびリスナーを始動します。

```
/opt/mqm/bin/strmqm WebSphereICS.queue.manager  
/opt/mqm/bin/runmqslsr -t TCP -p 1414 -m WebSphereICS.queue.manager
```

注: WebSphere MQ で 4 MB 以上のビジネス・オブジェクトを処理するには、使用するキュー・マネージャー、キュー、およびチャネルの「**最大メッセージ長 (Maximum Message Length)**」プロパティのデフォルト値を変更する必要があります。これらの値を変更するには、以下の作業を行います。

- a. 次のコマンドを入力します。

```
ALTER QMGR MAXMSGL(104857600)  
ALTER QLOCAL(queue_name) MAXMSGL(104857600)  
DEFINE CHANNEL(channel_name) CHLTYPE(SVRCONN) TRPTYPE(TCP) *  
MAXMSGL(104857600)
```

- b. WebSphere MQ をシャットダウンして再始動します。

2. 次のコマンドを入力して、InterChange Server Express と永続ネーミング・サーバーを始動します。

```
ProductDir/bin/ics_manager -start
```

サーバーが稼働中で、準備ができていることを検証するには、*ProductDir* の InterChangeSystem.log ファイルに、次のメッセージがあるかを確認してください。

```
InterChange Server "Server_Name" is ready
```

InterChange Server Express のセットアップ

InterChange Server Express を効率的に管理するには、InterChange Server Express を System Manager に登録し、System Manager を通じて InterChange Server Express に接続する必要があります。以下のセクションでは、これらのタスクを実行する方法について説明します。

- 『リモートの Windows マシンで System Manager を始動する』
- 『InterChange Server Express を System Manager に登録する』
- 35 ページの『InterChange Server Express への接続』
- 35 ページの『InterChange Server Express のパスワードの変更』
- 36 ページの『InterChange Server Express の再始動』

リモートの Windows マシンで System Manager を始動する

System Manager は、InterChange Server Express およびリポジトリとの GUI です。これは、Windows 2000 および Windows XP プラットフォームでのみ稼働します。

System Manager を始動するには、リモートの Windows マシン上で、「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM WebSphere Business Integration Express」 > 「Toolset Express」 > 「管理」 > 「System Manager」を選択します。

注: System Manager パースペクティブがデフォルトで表示されます。表示されない場合は、WebSphere WorkBench メニュー・バーで「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「その他」を選択して、「System Manager」をダブルクリックすれば、System Manager が始動します。

InterChange Server Express を System Manager に登録する

System Manager では、InterChange Server Express のインスタンスを管理できます。管理したいインスタンスは、System Manager に登録する必要があります。サーバーを登録すると、その名前は、サーバーが削除されない限り常に System Manager に表示されます。

InterChange Server Express インスタンスを登録するには、以下のステップに従います。

1. System Manager をホスティングする Windows クライアントがネーム・サーバーに正しくアクセスできるようにするため、`ProductDir\bin\CWSharedEnv.bat` ファイルの `ORB_HOST` プロパティが、InterChange Server Express を稼働しているマシンの IP アドレスに設定されていることを確認します。このように設定されていない場合は、この値を設定するため、Windows クライアントのコマンド行で次のコマンドを入力してください。

```
set ORB_HOST=IP_address
```

注: あるいは、`ORB_HOST=machine_name` と設定して、`%windir%\system32\drivers\etc\hosts` ファイルに `IP_address machine_name` 行を追加します。この例では、`IP_address` は InterChange Server Express をホスティングするマシンの IP アドレスで、`machine_name` は InterChange Server Express をホスティングするマシンの名前です。

2. ネーム・サーバーが Linux マシン上の InterChange Server Express を名前で正しく検索できるようにするため、Linux マシン上の /etc/hosts ファイルに次のようなエントリーがあることを確認します。

```
ip_address localhost.localdomain localhost
```

3. System Manager で、左ペインの「InterChange Server インスタンス」を右マウス・ボタンでクリックして、「サーバーを登録」を選択します。
4. 「新規サーバーを登録」ダイアログ・ボックスで、InterChange Server Express の名前をブラウズするか、入力します。

注: 統合テスト環境でサーバーを使用する予定の場合は、「テスト・サーバー」チェック・ボックスを選択します。統合テスト環境は、ローカル・テスト・サーバーとして登録されたサーバーとのみ通信します。

5. ユーザー名とパスワードを入力して、「ユーザー ID およびパスワードを保管」チェック・ボックスを選択します。デフォルトのユーザー名は admin で、パスワードは null です。
6. 「OK」を選択します。

サーバー名が System Manager ウィンドウの左ペインに表示されます。表示されない場合は、「InterChange Server インスタンス」フォルダーを展開してください。

InterChange Server Express への接続

登録された InterChange Server Express が稼働していることを、接続によって検証します。System Manager を使用して InterChange Server Express に接続するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインにある InterChange Server Express の名前を右マウス・ボタンでクリックして、「接続」を選択します。
2. 「サーバー・ユーザー ID およびパスワード」確認画面で「OK」を選択します。

ヒント: System Manager の左ペインにある InterChange Server Express の名前の横のアイコンが緑色であれば、InterChange Server Express はすでに System Manager に接続しています。

InterChange Server Express のパスワードの変更

InterChange Server Express は、InterChange Server Express 管理者だけが知っているパスワードによって保護されます。サーバーの出荷時のデフォルト・パスワードは null ですが、セキュリティのためにパスワードを変更したい場合は、システムのセットアップ後に変更できます。

InterChange Server Express のパスワードを変更するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「パスワードの変更」を選択します。
2. ダイアログが開くので、その中で旧パスワードおよび新規パスワードを入力し、確認のために新規パスワードを再入力して、「OK」を選択します。

InterChange Server Express の再始動

パスワードの変更を有効にするには、InterChange Server Express をシャットダウンして再始動する必要があります。その手順は以下のとおりです。

1. System Manager で、左ペインにある稼働中の InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「シャットダウン」を選択します。
2. 「サーバーをシャットダウン」ダイアログ・ボックスで、現在の作業を終了した後にサーバーを正常にシャットダウンするか、あるいはクリーンアップを実行しないで即時にシャットダウンします。

「正常」を選択して、「OK」を選択します。

注: 待たずにサーバーをシャットダウンする必要がある場合のみ、「即時に」を選択してください。

3. 次のコマンドを入力して、InterChange Server Express を再始動します。

```
ProductDir/bin/ics_manager -start
```

4. System Manager で InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、InterChange Server Express に接続します。ダイアログが開くので、その中でサーバーのユーザー名とパスワードを入力して、「OK」を選択します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了しました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合に、インストールが正しく行われ、正常に動作することを検証するには、37 ページの『第 5 章 インストールの検証』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかった場合は、次のいずれかを行います。
 - WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
 - オプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、39 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進みます。
 - オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 をインストール済みで、Express Plus V4.3.1 にアップグレードする場合は、59 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

第 5 章 インストールの検証

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合は、System Test と呼ばれるサンプルが得られます。このサンプルを使用すると、インストールしたシステムの動作を検証できます。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『System Test サンプルを実行するための説明の検索』
- 『次のステップに進む』

System Test サンプルを実行するための説明の検索

システムが正常にインストールされ、稼働していることを確認するには、System Test サンプルを実行します。このサンプルの実行手順の説明は、「クイック・スタート・ガイド」に記載されています。この資料は、Launchpad の「最初のステップ」というラベルの付いたボタンを選択すると参照できます。

注: 先に System Test サンプルを実行してから Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールすることをお勧めします。

サンプルを正常に実行したら、このセクションに戻り、『次のステップに進む』の内容をよく読んでください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了し、確認されました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、39 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストールのオプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 をインストール済みで、Express Plus V4.3.1 にアップグレードする場合は、59 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール

WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境では、オプションの Adapter Capacity Pack を介して提供されるアダプターを最大で 3 つ サポートできます。(Adapter Capacity Pack は、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境では使用できません)。これらの 3 つのアダプターは、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時にインストールされた 5 つのアダプターとは別に扱われます。

Launchpad は、Adapter Capacity Pack のインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。2 番目の GUI も用意されており、製品をアンインストールするときに使用します。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『GUI による Adapter Capacity Pack のインストール』
- 43 ページの『GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール』
- 44 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、75 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Adapter Capacity Pack のインストール

Adapter Capacity Pack を正常にインストールするには、次に示す前提条件を満足する必要があります。

- WebSphere Business Integration Server Express は、アダプターのインストール先マシンと同じマシンにはインストールできません。(Adapter Capacity Pack に付属のアダプターと組み合わせて使用できるのは、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境のみです。)
- アダプターを InterChange Server Express と同じマシンにインストールしない場合は、アダプターのインストール先と同じマシンに WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 Client のインストール環境が存在する必要があります。
- アダプターのライセンスを正常に登録するため、InterChange Server Express は稼動している必要があります。また、リモート・マシンにインストールされている場合は、稼動状態で、かつ到達可能である必要があります。

Adapter Capacity Pack に付属のインストール GUI は、最大 3 つのアダプターを InterChange Server Express にインストールして登録します。この 3 つのアダプターは、42 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションに記載のリストから選択できます。インストーラーによってインストールおよび登録されるアダ

プターは、一度に 1 つのみです (したがって、Adapter Capacity Pack のインストーラーは、インストールするアダプターごとに別個に実行する必要があります)。

Launchpad を呼び出してインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。

2. 「**Adapter Capacity Pack のインストール**」を選択します。

「ユーザーの選択」画面が表示されます。

3. 「ユーザーの選択」画面で、Adapter Capacity Pack をインストールするユーザーの名前を入力して、「**製品のインストール**」を選択します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。

4. 該当の CD をマシンに挿入して、「**OK**」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。) GUI が起動して Adapter Capacity Pack のインストールが開始され、「ようこそ」画面が表示されます。

5. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

6. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「**フィーチャー (Feature)**」画面が表示されます。

注: 英語以外のロケールでインストーラーを実行している場合は、「**英語**」というラベルのボタンが「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面に表示されます。ソフトウェアご使用条件を英語で表示するには、このボタンを選択します。このボタンを選択すると、ボタンのテキストは、インストーラーに使用されていた英語以外の言語に変更されます。ソフトウェアご使用条件を、インストーラーに使用されている英語以外の言語で表示するには、このボタンをもう一度選択します。

7. 「**フィーチャー (Feature)**」画面で、使用可能なアダプターのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、アダプターを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。どのアダプターを選択するかの詳細については、42 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。

次のいずれかの画面が表示されます。

- InterChange Server Express がローカル・マシンにインストールされている場合は、「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。この場合は、ステップ 10 に進んでください。
 - InterChange Server Express がリモート・マシンに存在する場合は、「サーバー IP アドレスの構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 8 に進んでください。
8. 「サーバー IP アドレスの構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールしたコンピューターの IP アドレスを入力します。InterChange Server Express が OS/400 マシンにインストールされている場合は、「InterChange Server Express は OS/400 上にあります。」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択します。次に、「次へ」を選択します。次のいずれかの画面が表示されます。
- 「InterChange Server Express は OS/400 上にあります。」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択しなかった場合は、「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。この場合は、ステップ 10 に進んでください。
 - 「InterChange Server Express は OS/400 上にあります。」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択した場合は、「サーバー名の構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 9 に進んでください。
9. 「サーバー名の構成」画面で、次の手順を実行します。
- a. OS/400 マシンの InterChange Server Express インスタンスの名前を入力します。(デフォルトは QWBIDFT です。インスタンスに別の名前を付けた場合は、その名前を入力します。)
 - b. ORB ポート番号を入力します。(デフォルトは 14500 です。別のポート番号を使用した場合は、その番号を入力します。)
- 次に、「次へ」を選択します。

「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。

10. 「InterChange Server Express パスワード」画面で、InterChange Server Express のユーザー admin のパスワードを入力して、「次へ」を選択します。

「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されません。

11. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「次へ」をクリックします。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のファイル・システム上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
- 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、インストーラーは、このアダプターのライセンスを登録するためにサーバーへ接続しようとします。メ

ッセージ・ダイアログにより、アダプターが正常に登録されたかどうか通知されます。登録が正常に完了しなかった場合や、InterChange Server Express に登録できるアダプターの最大数を超過していた場合は、エラー・ダイアログによって警告されます。「OK」を選択して、ダイアログを終了します。システムがライセンス・ファイルを更新する仕組みの詳細については、『ライセンス・ファイルの更新』を参照してください。「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示され、プロセスが正常に実行されたか、または問題が検出されたことが示されます。

12. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストールするアダプターの決定

Adapter Capacity Pack インストーラーを実行すると、次の中からアダプターのコンポーネントを 1 つ選択できます。

- Adapter for mySAP.com
- Adapter for Oracle Applications
- Adapter for Telcordia
- Adapter for WebSphere Commerce

注:

1. 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。
 - e-Mail アダプター
 - XML データ・ハンドラー
 - アダプター・フレームワーク
2. Adapter for MetaSolv Applications、Adapter for JD Edwards OneWorld、Adapter for Siebel eBusiness Applications、Adapter for i2、および Adapter for PeopleSoft は、Windows 2000 および Windows 2003 プラットフォーム上でのみサポートされます。ただし、これらのアダプターのそれぞれは、Linux プラットフォームにインストールされている InterChange Server Express と通信するための分散アダプターとして構成できます。分散アダプターの構成については、「システム・インプリメンテーション・ガイド」を参照してください。

個々のアダプターの説明については、Web サイト

<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> にあるアダプターの資料を参照してください。

ライセンス・ファイルの更新

Adapter Capacity Pack のインストーラーおよびアンインストーラーは、アダプターがインストールまたはアンインストールされるたびに、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントにあるアダプター・ライセンス・ファイルを更新します。このようにして、ライセンス・ファイルは常に最新の状態に維持されます。Adapter Capacity Pack からインストールされるアダプターは、InterChange Server Express に 3 つまで登録できます。これ

らの 3 つのアダプターは、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時にインストールされた 5 つのアダプターとは別に登録できます。

インストーラーおよびアンインストーラーは、InterChange Server Express の接続パスワードを、インストール処理時やアンインストール処理時に「InterChange Server Express パスワード」画面から取得します。インストール処理およびアンインストール処理の終了間際になると、メッセージ・ダイアログにより、アダプターが正常に登録されたかどうか通知されます。登録が正常に完了しなかった場合や、InterChange Server Express に登録できるアダプターの最大数を超過していた場合は、エラー・ダイアログによって警告されます。

注: アダプターは、必要な数だけインストールできます。ただし、InterChange Server Express に登録できるアダプターの数、最大で 8 つ です。この数は、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時に選択したアダプターの数 (最大 5 つ) と、Adapter Capacity Pack インストーラーを実行してインストールしたアダプターの数を加えた 合計です。

GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Adapter Capacity Pack のインストール環境を削除するためのアンインストール GUI プログラムを用意しています。

要確認: InterChange Server Express のアダプター・ライセンス・ファイルがアンインストールによって更新されたことを確認するには、アンインストール処理時に InterChange Server Express が稼働している必要があります。

アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 次のコマンドを入力して、アンインストール GUI を起動します。

```
ProductDir/_uninstAdapterCP/uninstall.bin
```

「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面が表示されます。

2. 「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面で、「次へ」をクリックします。

「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。

3. 「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面で、削除するコンポーネントを選択状態のままにして、「次へ」を選択します。

「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

4. 「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「次へ」をクリックします。

「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。

5. 「InterChange Server Express パスワード」画面で、InterChange Server Express のユーザー admin のパスワードを入力して、「次へ」を選択します。システムがライセンス・ファイルを更新する仕組みの詳細については、42 ページの『ライセンス・ファイルの更新』を参照してください。

メッセージ・ダイアログが表示されます。このダイアログの通知内容は、次のとおりです。

- ライセンスが正常に更新された場合は、「OK」を選択してダイアログを終了します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除され、「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面が表示されます。
 - ライセンスが正常に更新されなかった場合は、「はい」を選択して、ライセンスを更新せずにアンインストールを継続するか、または「いいえ」を選択して、アンインストールを取り消します。「はい」を選択すると、選択されたコンポーネントはアンインストーラーによって削除され、「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面が表示されます。
6. 「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

次のステップに進む

Collaboration Capacity Pack のインストールを計画しているかどうかに応じて、次のいずれかを実行します。

- Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、WebSphere Business Integration Server Express Plus およびこの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成に関する情報を得るために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んでください。

第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール

オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールすると、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境を使用して、いずれかの コラボレーション・グループを使用できるようになります。(Collaboration Capacity Pack は、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境では使用できません)。WebSphere Business Integration Server Express Plus の 1 つのインストール環境と組み合わせて使用するためにインストールできる Collaboration Capacity Pack は、1 つだけです。

Launchpad は、Collaboration Capacity Pack のインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。2 番目の GUI も用意されており、製品をアンインストールするときに使用します。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール』
- 48 ページの『GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール』
- 49 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、75 ページの『付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール

Collaboration Capacity Pack を正常にインストールするには、次に示す前提条件を満足する必要があります。

- Collaboration Capacity Pack のインストール先にするマシンには、あらかじめ WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールしておく必要があります (Collaboration Capacity Pack は、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境にはインストールできません)。
- Collaboration Capacity Pack は、InterChange Server Express コンポーネントのインストール先と同じマシンにインストールする必要があります。
- Collaboration Capacity Pack の既存のインストール環境を対象のマシンに構築することはできません。
- InterChange Server Express のコンポーネントは、稼動状態にできません。

Collaboration Capacity Pack のインストール GUI を使用すると、選択したコラボレーション・グループがインストールされ、インストールされた内容が InterChange Server Express に配置されます。

Launchpad を呼び出してこのインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad で、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。

2. 「**Collaboration Capacity Pack のインストール**」を選択します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。
3. 該当の CD をマシンに挿入して、「**OK**」を選択します。(Launchpad がインストール・プログラムを検出しない場合は、「開く」ダイアログ・ボックスが表示されるので、その中で CD がマウントされているロケーションを選択する必要があります。) GUI が起動して、Collaboration Capacity Pack のインストールが開始されます。Launchpad は、最初に、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされているかどうかを検査します。次に、以下のように動作します。

- InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされていない場合は、インストールが失敗する可能性があることを警告ダイアログによって警告します。「**キャンセル**」を選択してインストールを取り消すか、または「**インストール**」を選択して、インストールを続けます。インストールの継続を選択した場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
- InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされている場合は、「ようこそ」画面が表示されます。

4. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

5. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「**フィーチャー (Feature)**」画面が表示されます。

注: 英語以外のロケールでインストーラーを実行している場合は、「**英語**」というラベルのボタンが「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面に表示されます。ソフトウェアご使用条件を英語で表示するには、このボタンを選択します。このボタンを選択すると、ボタンのテキストは、インストーラーに使用されていた英語以外の言語に変更されます。ソフトウェアご使用条件を、インストーラーに使用されている英語以外の言語で表示するには、このボタンをもう一度選択します。

6. 「**フィーチャー (Feature)**」画面で、使用可能なコラボレーション・グループのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、コラボレーション・グループを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。この画面から選択できるコラ

ボレーション・グループの詳細については、『インストールするコラボレーション・グループの決定』を参照してください。

「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されません。

7. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「次へ」をクリックします。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のファイル・システム上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。
8. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストールするコラボレーション・グループの決定

Collaboration Capacity Pack をインストールすると、次の中からコラボレーション・グループを 1 つ選択できます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
- Collaborations for Order Management V1.0
- Collaborations for Procurement V1.0

各コラボレーション・グループは、次に示す個別のコラボレーションを複数集めて構成されます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
 - Collaboration for Contact Manager
 - Collaboration for Contract Sync
 - Collaboration for Customer Manager
 - Collaboration for Customer Credit Manager
 - Collaboration for Installed Product
 - Collaboration for Billing Inquiry
 - Collaboration for Vendor Manager
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
 - Collaboration for AR Invoice Sync
 - Collaboration for Department Manager
 - Collaboration for Employee Manager
 - Collaboration for GL Movement

- Collaboration for Invoice Generation
- Collaborations for Order Management V1.0
 - Collaboration for ATP To Sales Order
 - Collaboration for Available To Promise
 - Collaboration for Item Manager
 - Collaboration for Price List Manager
 - Collaboration for Sales Order Processing
 - Collaboration for Order Billing Status
 - Collaboration for Order Delivery Status
 - Collaboration for Order Status
 - Collaboration for Return Billing Status
 - Collaboration for Return Delivery Status
 - Collaboration for Return Status
 - Collaboration for Contact Manager
 - Collaboration for Customer Manager
 - Collaboration for Trading Partner Order Management
- Collaborations for Procurement V1.0
 - Collaboration for Inventory Level Manager
 - Collaboration for Inventory Movement
 - Collaboration for BOM Manager
 - Collaboration for Purchasing
 - Collaboration for Vendor Manager

インストーラーは、対象のコラボレーション・グループに関連するすべてのファイルをインストールします。これには、すべてのコラボレーションが使用する一連の汎用ビジネス・オブジェクトも含まれます。個々のコラボレーションに関する資料は、<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> でダウンロード、インストール、および表示することができます。

GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Collaboration Capacity Pack のインストール環境を削除するための アンインストール GUI プログラムを用意しています。アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 次のコマンドを入力して、アンインストール GUI を起動します。

```
ProductDir/_uninstCollabCP/uninstall.bin
```

「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面が表示されます。

2. 「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面で、「次へ」をクリックします。

「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

3. 「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「次へ」をクリックします。アンインストーラーによってコンポーネントが削除されます。

「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

4. 「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境に Collaboration Capacity Pack を正常にインストールしたら、次に示す情報を取得するために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進みます。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus またはオプションの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成。
- コラボレーション・オブジェクト、ビジネス・オブジェクト、およびマップの構成。
- リポジトリへのオブジェクトの配置。

第 8 章 System Monitor および Failed Event Manager の手動構成

System Monitor とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムを Web からモニターするためのツールです。System Monitor を使用すると、データの表示方法や、現在のデータに加えて履歴データをどのように表示するかを構成できます。

Failed Event Manager とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムで失敗したイベントを Web から処理し、失敗したイベントへの役割ベースのアクセスをセットアップする (Tomcat 4.1.24 を使用するシステムの場合のみ) ためのツールです。(カスタムの役割を作成するには、WebSphere Studio Site Developer ツールをインストールする必要があります。詳細については、57 ページの『WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール』に記載されている手順を参照してください。) Failed Event Manager のセキュリティーを構成する方法の詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

要確認: この章の説明に従うのは、Toolset Express の System Monitor コンポーネントおよび Failed Event Manager コンポーネントを使用し、同時に次の条件が満たされている場合のみにしてください。

- WebSphere Application Server バージョン 5.0.2 または 5.1、あるいは WebSphere Application Server Express 5.0.2 または 5.1 を Web アプリケーション・サーバーとして使用しているが、これらをインストールしたのは WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後である場合。この場合は、52 ページの『System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express の使用』のセクションを参照してください。
- Tomcat 4.1.24 および 4.1.27 を Web アプリケーション・サーバーとして使用している場合。この場合は、55 ページの『System Monitor および Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用』のセクションを参照してください。

サポートされているバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express が使用システム上で終了した後に、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の Administrative Toolset Express コンポーネントをインストールした場合は、この章の説明に従う必要はありません。この場合、System Monitor および Failed Event Monitor は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express と連動するように、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーによって自動的にインストールされ、構成されます。

この自動構成では、IBM HTTP Server などの Web サーバーがインストールされていないことを前提にしています。作成されるアプリケーション・サーバーの名前は、ICSMonitor です。System Monitor および Failed Event Manager は、デフォルトのポート番号である 7089 を使用するよう構成されます。リモートの Windows マシンで動作している Web ブラウザーから System Monitor にアクセスするには、URL `http://hostname:7089/ICSMonitor` にアクセスします。Failed Event Manager の場合は、URL `http://hostname:7089/FailedEvents` にアクセスします。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express の使用』
- 55 ページの 『System Monitor および Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用』
- 57 ページの 『WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール』
- 58 ページの 『次のステップに進む』

System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express の使用

このセクションでは、System Monitor および Failed Event Manager を構成して、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用する方法について説明します。Tomcat を使用する手順の説明については、55 ページの 『System Monitor および Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用』を参照してください。

System Monitor および Failed Event Manager を構成して WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するには、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属のスクリプトを実行します。このスクリプトは `CWDashboard.sh` と呼ばれ、ディレクトリー `ProductDir/bin` に置かれています (`ProductDir` は、デフォルトではディレクトリー `Home_directory/IBM/WebSphereServer` を表します)。このスクリプトを実行すると、IBM HTTP Web Server などの Web サーバーとツールを連動させるかどうかを構成できます。

先に進む前に、WebSphere Application Server か、WebSphere Application Server Express バージョン 5.0.2 または 5.1 をインストール済みであることを確認します。(WebSphere Application Server Express V5.1 は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の Launchpad からインストールできます)。次に、使用環境で Web サーバーを使用するかしないかに応じて、次のいずれかのセクションに進みます。

- 53 ページの 『Web サーバー使用時の System Monitor および Failed Event Manager の構成』

- 54 ページの『Web サーバー不使用時の System Monitor および Failed Event Manager の構成』

Web サーバー使用時の System Monitor および Failed Event Manager の構成

WebSphere Application Server には、Web サーバーが付属しています。しかし、WebSphere Application Server Express には付属していません。WebSphere Application Server Express を使用していて、Web サーバーを使用する場合は、IBM HTTP Server (IBM Web サイトから無料で入手可能) および WebSphere Application Server Express の Web サーバー・プラグインを入手してインストールする必要があります。詳細については、WebSphere Application Server Express の資料を参照してください。

System Monitor および Failed Event Manager を構成して Web サーバーを使用するには、以下の手順を実行します。

1. 以下のパラメーターを指定して CWDashboard.sh を実行します。
 - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express のインストール・パス。例えば、/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer
 - インストール先となるマシンの完全修飾ホスト名。例えば、hostname.ibm.com
 - WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール・ディレクトリー。例えば、Home_directory/IBM/WebSphereServer
 - DB2 インストール環境の java ディレクトリーへのパス。例えば、DB2_Installation_Dir/java
 - y (HTTP サーバーの場合は yes)

コマンド例を以下に示します。

```
Home_directory/IBM/WebSphereServer/CWDashboard.sh      ¥
/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer                 ¥
hostname.ibm.com "Home_directory/IBM/WebSphere/Server"  ¥
"DB2_Installation_Dir/java" y
```

要確認: この手順中のいくつかのステップでは、1 つ以上の行でコマンドが改行されています。これらの改行が挿入されたのは、ページ内にテキストが収まるようにするためです。実際にコマンドを入力する場合は、これらの箇所に改行ではなくスペースを挿入してください。

2. WebSphere 管理者コンソール (リモート Windows マシンの Web ブラウザーからアクセス可能) から、左側ナビゲーション・ペインの「**環境 (Environment)**」を展開し、「**Web サーバー・プラグインの更新 (Update Web Server Plugin)**」リンクを選択して、「**OK**」を選択します。
3. ICSMonitor Application Server が開始された場合は、次のコマンドで停止します。


```
/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer/bin/stopServer.sh ICSMonitor
```
4. 次のコマンドを実行します。


```
./home/db2inst1/sqllib/db2profile
```
5. ICSMonitor Application Server を次のコマンドで開始します。


```
/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer/bin/startServer.sh ICSMonitor
```

6. System Monitor にアクセスするには、次の URL を入力します。

`http://hostname/ICSMonitor`

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

7. Failed Event Manager にアクセスするには、次の URL を入力します。

`http://hostname/FailedEvents`

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

Web サーバー不使用時の System Monitor および Failed Event Manager の構成

インストール環境で Web サーバーを使用していない場合は、System Monitor および Failed Event Manager を構成して、これらが異なるポート番号を使用するようにする必要があります。以下の手順を実行します。

1. 以下のパラメーターを指定して、*ProductDir/bin/CWDashboard.sh* を実行します。
 - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express のインストール・パス。例えば、`/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer`
 - インストール先となるマシンの完全修飾ホスト名。例えば、`hostname.ibm.com`
 - WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール・ディレクトリー。例えば、`Home_directory/IBM/WebSphereServer`
 - DB2 インストール環境の `java` ディレクトリーへのパス。例えば、`DB2_Installation_Dir/java`
 - `n` (HTTP サーバーの場合は `no`)
 - 新しいポート番号。例えば、`7089`
 - 新しい SSL ポート番号 (デフォルトは `7043`)

コマンド例を以下に示します。

```
Home_directory/IBM/WebSphereServer/CWDashboard.sh      ¥
"/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer"              ¥
hostname.ibm.com "Home_directory/IBM/WebSphereServer   ¥
"DB2_Installation_Dir/java" n 7089 7043
```

要確認: この手順中のいくつかのステップでは、1 つ以上の行でコマンドが改行されています。これらの改行が挿入されたのは、ページ内にテキストが収まるようにするためです。実際にコマンドを入力する場合は、これらの箇所に改行ではなくスペースを挿入してください。

2. ICSMonitor Application Server が開始された場合は、次のコマンドで停止します。

```
/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer/bin/stopServer.sh ICSMonitor
```

3. 次のコマンドを実行します。

```
./home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

4. ICSMonitor Application Server を次のコマンドで開始します。
`/opt/IBM/WebSphere/Express502/AppServer/bin/startServer.sh ICSMonitor`
5. System Monitor にアクセスするには、次の URL を入力します。
`http://hostname:portnumber/ICSMonitor`

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

6. Failed Event Manager にアクセスするには、次の URL を入力します。
`http://hostname:portnumber/FailedEvents`

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

System Monitor および Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用

このセクションでは、System Monitor および Failed Event Manager を構成して、Tomcat を使用する方法について説明します。Tomcat ではなく、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を Web アプリケーション・サーバーとして使用する場合の手順については、52 ページの『System Monitor および Failed Event Manager の構成による WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express の使用』を参照してください。先に進む前に、Tomcat バージョン 4.1.24 または 4.1.27 がシステムにインストールされていることを確認してください。

注: Tomcat 4.1.24 および 4.1.27 は、2 バイト文字セット (DBCS) の言語環境ではサポートされていません。

System Monitor の構成による Tomcat の使用

System Monitor を構成して Tomcat を使用するには、以下の手順に従います。

1. ICSMonitor ディレクトリーを *Tomcat_home/webapps* ディレクトリーに作成します (*Tomcat_home* は、ご使用の環境における Tomcat のインストール先へのパスを表します)。
2. WAR ファイルの内容を ICSMonitor ディレクトリーに解凍します。

注: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーを使用して製品をインストールした場合、*CWDashboard.war* ファイルは *ProductDir/WBSM* ディレクトリーに置かれています。

3. *Tomcat_home/webapps/ICSMonitor/WEB-INF/lib* から *Tomcat_home/common/lib* に *xerces.jar* ファイルをコピーします。
4. *Tomcat_home/common/endorsed* ディレクトリーに置かれている *xercesImpl.jar* ファイルの名前を *xercesImpl.jar.old* に変更します。
5. 次の手順を実行して、*Tomcat_home/bin* ディレクトリーにある *setclasspath.sh* ファイルを編集します。

- a. JAVA_OPTS プロパティを次のように設定します。

```
-DDASHBOARD_URL=http://HostName[:PortNumber]/ICSMonitor
-DDASHBOARD_HOME=Tomcat_home/webapps/ICSMonitor
-DORBNamingProvider=CosNaming
-Dorg.omg.CORBA.ORBClass=com.ibm.CORBA.iiop.ORB
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialPort=ORB_PORT
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialHost=ORB_HOST
-Dcom.ibm.CORBA.Debug.Output=stdout
```

要確認: 文字 `-D` で始まる行は、ページ内に収まるようにすべて別個の行として表示してあります。`-D` で始まる行の間は、改行ではなく、必ずスペースを挿入してください。

- b. `db2java.zip` ファイルへのパスを `setclasspath.sh` のクラス・パスに追加します。`db2java.zip` ファイルは、デフォルトでは `DB2_Installation_Dir/java` ディレクトリにあります。

6. (オプション) `Tomcat_home/conf/server.xml` ファイルのポート番号を変更します。

デフォルト・ポート番号は 8080 です。

7. 次のコマンドを実行します。

```
./home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

8. 次のように入力して、Tomcat を開始します。

```
Tomcat_home/bin/startup.sh
```

Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用

Failed Event Manager を構成して Tomcat を使用するには、以下の手順に従います。

1. FailedEvents ディレクトリを `Tomcat_home/webapps` ディレクトリに作成します (`Tomcat_home` は、ご使用の環境における Tomcat のインストール先へのパスを表します)。
2. WAR ファイルの内容を FailedEvents ディレクトリに解凍します。

注: FailedEvents.war ファイルは、`ProductDir/WBFEM/Tomcat` ディレクトリにあります。

3. `Tomcat_home/webapps/FailedEvents/WEB-INF/lib` から `Tomcat_home/common/lib` に `xerces.jar` ファイルをコピーします。
4. `Tomcat_home/common/endorsed` ディレクトリに置かれている `xercesImpl.jar` ファイルの名前を `xercesImpl.jar.old` に変更します。
5. 次の手順を実行して、`Tomcat_home/bin` ディレクトリにある `setclasspath.sh` ファイルを編集します。

- a. JAVA_OPTS プロパティを次のように設定します。

```
-DFEM_HOME=Tomcat_home/webapps/FailedEvents
-DORBNamingProvider=CosNaming
-Dorg.omg.CORBA.ORBClass=com.ibm.CORBA.iiop.ORB
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialPort=ORB_PORT
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialHost=ORB_HOST
-Dcom.ibm.CORBA.Debug.Output=stdout
```

要確認: 文字 `-D` で始まる行は、ページ内に収まるようにすべて別個の行として表示してあります。`-D` で始まる行の間は、改行ではなく、必ずスペースを挿入してください。

- b. `db2java.zip` ファイルへのパスを `setclasspath.sh` のクラス・パスに追加します。`db2java.zip` ファイルは、デフォルトでは `DB2_Installation_Dir/java` ディレクトリーにあります。
6. (オプション) `Tomcat_home/conf/server.xml` ファイルのポート番号を変更します。

デフォルト・ポート番号は 8080 です。

7. 次のコマンドを実行します。

```
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

8. 次のように入力して、Tomcat を開始します。

```
Tomcat_home/bin/startup.sh
```

デフォルトでは、Failed Event Manager の Tomcat 4.1.24 バージョンのセキュリティーが使用可能になっています。管理者がアプリケーションに対する全アクセス権限を取得できるように、管理者の役割を持つユーザーを `Tomcat_home/conf/server.xml` ファイルに作成する必要があります。Failed Event Manager での役割の作成方法やセキュリティーの使用の詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

WebSphere Studio Site Developer ツールのインストール

Failed Event Manager の機能を最大限に活用するには、WebSphere Studio Site Developer ツールが必要です。

WebSphere Studio Site Developer ツールをインストールするには、以下の手順を実行します。

1. *WebSphere Application Server - Express V5.1 Components Disk 1* というラベルの CD をマシンに挿入します。
2. 次のコマンドを入力して、WebSphere Application Server Launchpad を開始します。

```
mount /dev/cdrom mount_point  
mount_point/IBMWASExp5.1/launchpad.sh
```

3. 「インストール」を選択して、インストール・プログラムを開始します。

「ようこそ」画面が表示されます。

4. 「ようこそ」画面で、「次へ」を選択して、WebSphere Application Server - Express V5.1 をインストールするかどうかを確認します。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

5. 「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面で、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」という項目の隣にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

「セットアップ (Setup)」画面が表示されます。

6. 「セットアップ (Setup)」画面で、「カスタム」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。

「機能 (Feature)」画面が表示されます。

注: デフォルトでは、インストール・プログラムによって「標準 (Typical)」インストールが選択されます。ただし、「機能パネル (Feature Panel)」で「WebSphere Studio Site Developer」が選択されていることを確認するには、「カスタム」インストールを選択する必要があります。

7. 「機能 (Feature)」画面の「製品インストール (Product Installation)」>「開発ツール」で、「**WebSphere Studio Site Developer 5.1.1 (5.1 Test Environment 付属) (WebSphere Studio Site Developer 5.1.1 (with 5.1 Test Environment))**」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

「宛先」画面が表示されます。

8. 「宛先」画面で、デフォルトのインストール場所を /opt/IBM/WebSphere/Express51 で上書きします。インストールが開始されず。

注: デフォルト値は /opt/IBM/WebSphere/AppServer です。

9. インストール開始後、*WebSphere Application Server - Express V5.1 Components Disk 2* というラベルの付いた CD を挿入するようインストール・プログラムに求められます。この CD を挿入して、「OK」を選択します。インストールが完了し、「ポストインストール (Post-installation)」画面が表示されます。
10. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

次のステップに進む

システムの前提条件ソフトウェアのインストール、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、System Monitor および Failed Event Manager の構成が正常に完了したら、33 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』に記載されている WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムの開始方法に関する説明に進んでください。

第 9 章 システムのアップグレード

この章では、WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へアップグレードするための一般的な手順について説明します。このセクションの内容は以下のとおりです。

- 『システム前提条件の適合』
- 60 ページの『既存のシステムの準備』
- 62 ページの『WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へのアップグレード』
- 66 ページの『新規のアップグレード・バージョンの始動』
- 67 ページの『アップグレードの検証』
- 67 ページの『アップグレード・バージョンのテスト』
- 67 ページの『アップグレード・バージョンのバックアップ』
- 68 ページの『次のステップに進む』

システム前提条件の適合

アップグレード手順の実行中、あらかじめインストールしたコンポーネントは、アップグレードのために事前選択され、選択解除はできなくなっています。まだインストールしていない追加コンポーネントは、アップグレード処理中に選択できます。アップグレード手順では、以下のことを前提にしています。

- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 はすでにマシンにインストールされており、今度は WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 をインストールしようとしている。
- コンポーネントのインストール先マシンは、Linux オペレーティング・システムが稼働している実稼働環境のマシンである。実稼働環境の Linux の各バージョンでサポートされている製品コンポーネントのリストについては、70 ページの表 4 を参照してください。開発環境の Linux バージョンでは、サポートされているコンポーネントはありません。
- アップグレードを開発環境で実行し、システム・テスト完了後にアップグレード済みソフトウェアを実稼働環境に移行する予定である。
- 該当するすべてのソフトウェアが使用可能である。必須ソフトウェアのリストについては、69 ページの『ソフトウェア要件の確認』を参照してください。
- InterChange Server Express コンポーネント、Toolset Express、アダプター、およびサンプル・コンポーネントがそれぞれ別個のマシンに存在する場合、これらのアップグレードを実行する。これを実行するには、各種マシンに該当するプラットフォームに応じたインストーラーを実行します。
- 3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動と停止および「クイック・スタート・ガイド」の表示』に記載されている情報を熟読し、理解した。

既存のシステムの準備

システムをアップグレードするには、その前に次の手順を実行する必要があります。

- 『システムを静止状態にする方法』
- 『システムのバックアップ』
- 62 ページの『システムのシャットダウン』

システムを静止状態にする方法

システムをアップグレードするには、その前にシステムが静止状態であることを確認する必要があります。つまり、環境をバックアップしてアップグレード手順を実行する前に、進行中のイベントをすべて完了し、未確定のトランザクションをすべて解決します。

以下の手順では、システムを静止状態にする方法について説明します。

1. 失敗したイベントを再実行依頼するか、そのイベントを破棄します（このステップはオプションです）。
2. すべてのコネクタについてイベント表のポーリングを停止するため、コネクタの PollFrequency プロパティを No に設定してコネクタを再始動します。
3. 進行中のイベントを含め、システムですべてのイベントを実行します。必ず未確定トランザクションをすべて解決してください。
4. キューから以前のイベントをすべて除去することにより、キューをクリアします。

注: 手順 4 は、失敗したイベントを処理せずにアプリケーションから再実行依頼する場合のみ行ってください。それ以外の場合、キューは空になっているはずですが、念のため再確認してください。

実行中のシステムを正常に停止する方法については、「システム管理ガイド」を参照してください。

システムのバックアップ

システムのバックアップを作成すると、新規バージョンのインストール時に不注意でファイルを上書きしても、そのファイルを回復できます。アップグレード手順を実行する前に、静的データと動的データ（アップグレードにかかわらず定期的にバックアップされる変更可能データ）の両方のバックアップを作成します。静的データおよび動的データの例については、61 ページの表 2 を参照してください。

システムのバックアップを作成するには、以下の手順を行います。

- `repos_copy` ユーティリティを使用して、現在の ICS Express リポジトリをバックアップします。例えば、InterChange Server Express のインスタンスには WICSEX という名前が付いており、デフォルトのログイン ID 「admin」とデフォルトのパスワード 「null」があるものとします。次の `repos_copy` コマンドを実行すると、`RepositoryExpress.txt` というファイルにバックアップ・リポジトリ・オブジェクトが作成されます。

```
repos_copy -sWICSEX -oRepositoryExpress.txt -uadmin -pnull
```

- 製品ディレクトリーをバックアップします。このバックアップに組み込まれる重要な項目は、次のようなすべてのカスタマイズ項目です。
 - カスタムの .jar ファイル (カスタム・データ・ハンドラーなど) および Java パッケージ。これらは、通常、製品ディレクトリーの lib サブディレクトリーにあります。
 - すべての始動スクリプト
 - 次のディレクトリーにある WebSphere MQ の構成ファイル。
`ProductDir/mqseries/crossworlds_mq.tst`

IBM では、InterChange Server Express 製品ディレクトリー全体のシステム・バックアップをとることをお勧めします。

- システム管理者に依頼して、ファイル構造のバックアップを作成します。環境設定およびその他のファイルをコピーする必要があります。
- システム管理者に依頼して、IBM WebSphere MQ のバックアップを作成します。
- データベース管理者 (DBA) に依頼して、データベースのバックアップを作成します。これは、スキーマ情報、ストアード・プロシージャを含む完全なバックアップでなければなりません。ICS Express リポジトリ・データベースだけでなく、その他のデータベースも使用するためにシステムを構成した場合は、その他のデータベースのバックアップも同様に作成します。

注: このステップを実行するには、適切なデータベース・ユーティリティーを使用します。例えば、DB2 にはエクスポート・ユーティリティーが用意されています。手順については、データベース・サーバーの資料を参照してください。

表 2 に、各コンポーネントのバックアップ方法の概要を示します。

表 2. データのバックアップ方法

データのタイプ	バックアップ方法
静的データ リポジトリ	repos_copy ユーティリティーを使用し、カスタマイズしたシステム・コンポーネントの一部またはすべてを保管します。詳しくは、「システム管理ガイド」のコンポーネントのバックアップ方法の説明を参照してください。
カスタムのマップ Java クラス・ファイル (.class)	これらのファイルをシステム・バックアップに組み込むため、システム・バックアップに下記のディレクトリーがあることを確認してください。
カスタムのコネクタ	<code>ProductDir/DLMs</code> システム・バックアップにディレクトリー <code>ProductDir/connectors/connector_name</code> を含めます。ここで、「connector_name」はカスタム・コネクタの名前です。
カスタマイズされた始動スクリプト	始動スクリプトをカスタマイズしてある場合は、これらがシステム・バックアップに組み込まれていることを確認してください。
ICS Express 構成ファイル (InterchangeSystem.cfg)	<code>ProductDir</code> ディレクトリーにある ICS Express 構成ファイルをシステム・バックアップに組み込みます。

表 2. データのバックアップ方法 (続き)

データのタイプ	バックアップ方法
動的データ	
相互参照表、失敗したイベントの表、および関係表	データベースにはデータベース・バックアップ・ユーティリティを使用します。詳しくは、「システム管理ガイド」のシステム・コンポーネントのバックアップ方法の説明を参照してください。
コネクター・イベント・アーカイブ表	これらの表を含むデータベースには、データベース・バックアップ・ユーティリティを使用します。
ログ・ファイル	下記のディレクトリーをシステム・バックアップに組み込みます。 <i>ProductDir/logs</i>

システムのシャットダウン

バックアップが完了したら、次の手順でシステムをシャットダウンできます。

1. InterChange Server Express とその関連コンポーネントをシャットダウンします。
2. データベース・サーバーをシャットダウンします。
3. IBM Object Request Broker (ORB) をシャットダウンします。
4. WebSphere MQ をシャットダウンします。

システムのシャットダウンの詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad は、WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus の製品コンポーネントをインストールします。
- 選択した新規アダプターをインストールします。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリーを保存しますが、再配置はしません。
- InterChange Server Express を管理するために使用した Toolset Express ツールが格納されているリモート Windows マシン上で実行すると、このマシン上にある Toolset Express に Process Designer Express を追加します。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「製品のアップグレード」画面が表示されます。

2. 「製品のアップグレード」画面で、「次へ」をクリックします。

「ユーザーの選択」画面が表示されます。

3. 「ユーザーの選択」画面で、WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールするユーザーの名前を入力して、「次へ」を選択します。「サーバーのインストール」画面が表示されます。

要確認: アップグレードを実行するユーザーは、既存の WebSphere Business Integration Server Express V4.3 システムのインストール先ホーム・ディレクトリを所有するユーザーと同じユーザーである必要があります。

4. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。

- バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「**InterChange Server Express for Linux**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。

- バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない場合は、「**InterChange Server Express for Linux**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。

- 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。

- チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

「次へ」を選択します。

「ツールのインストール」画面が表示されます。

5. 「ツールのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。

- バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールをインストール済みの場合は、「**管理ツール**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。

- バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールをインストールしていない場合は、「**管理ツール**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。

- 前述のチェック・ボックスを選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.3.1 の管理ツールをインストールする。

- チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.3.1 の管理ツールがインストールされていない状態を維持する。

「次へ」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。

6. 「アダプターのインストール」画面で、バージョン 4.3.1 のアダプターをインストール済みの場合は、各インストール済みアダプターのそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可の状態になっています。さらに、Adapter for JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要であるため、このアダプターはデフォルトで選択されています。(System Test サンプルは、ステップ 7 で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です)。以下のいずれかを実行します。

- すでにインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「次へ」を選択します。
- すでにインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、「次へ」を選択します。
- すでにインストールされているアダプターと Adapter for JText 以外に、その他のアダプターもインストールする場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、追加するその他のアダプターのそばにあるチェック・ボックスも選択します。あるいは、「**アダプターをすべて選択**」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択して、まだインストールしていないすべてのアダプターをインストールします。次に、「次へ」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

要確認: アダプターは、必要な数だけインストールできます。ただし、WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールする場合、InterChange Server Express に登録できるアダプターの数は、最大で 5 つ です。

7. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。

- バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「**サンプル**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。
- バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない場合は、「**サンプル**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
 - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
 - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

「次へ」を選択します。

注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter

は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

8. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。
 - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 9 に進みます。
 - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要であると表示された場合は、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明について、8 ページの『必要なソフトウェア前提条件の識別』および 13 ページの『選択されたソフトウェア前提条件のインストール』のセクションを参照してください。
9. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されず。

10. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

注: インストーラーを英語以外のロケールで実行している場合は、この画面に「英語」というラベルの付いたボタンが表示されます。ソフトウェアご使用条件を英語で表示するには、このボタンを選択します。このボタンを選択すると、ボタンのテキストは、インストーラーに使用されていた英語以外の言語に変更されます。ソフトウェアご使用条件を、インストーラーに使用されている英語以外の言語で表示するには、このボタンをもう一度選択します。

次のいずれかの処理が実行されます。

- **InterChange Server Express** コンポーネントがすでにインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に **InterChange Server Express** コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件が存在し、正常に構成されていることと、**InterChange Server Express** コンポーネントがアップグレードまたはインストールされる対象のマシン上に 2 つ以下のプロセッサが存在することを確認します。
 - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
 - 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 12 (66 ページ) から手順を続行します。
- **InterChange Server Express** コンポーネントがインストールされておらず、アップグレード時にはインストールされない予定の場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。この場合、ステップ 11 (66 ページ) から手順を続行します。

11. 「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「次へ」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、28 ページの『ネーム・サーバーの構成』を参照してください。
12. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
 - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、いくつかの機能または下位機能を選択解除し、指定のファイル・システム上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「終了 (Finish)」を選択して、GUI を終了します。

新規のアップグレード・バージョンの始動

アップグレードが完了したら、以下の手順を実行することにより、既存のバージョンのリポジトリを使用して WebSphere Business Integration Server Express Plus システムを開始できます。

1. 必要なすべてのサポート・ソフトウェアが稼働していることを確認します。サポート・ソフトウェアの内容は、次のとおりです。
 - WebSphere MQ (Queue Manager および Listener の両方が稼働中であることを確認してください)
 - データベース・サーバー
2. InterChange Server Express を始動します。このコンポーネントを始動すると、永続的ネーミング・サーバーも自動的に始動します。

For instructions on how to start InterChange Server Express, refer to 33 ページの『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』。

ProductDir ディレクトリーの *InterChangeSystem.log* ファイルを調べると、始動が正常であったことを確認できます。

注: システムのアップグレード後に InterChange Server Express の始動に失敗した場合は、このアップグレード手順を調べて、すべての指示に従ったかどうかを確認してください。それでも失敗の原因が不明であれば、修正したり、バックアップから復元したりする前に、IBM ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

アップグレードの検証

アップグレードが正常に処理されたかを検証するには、リポジトリ・スキーマが作成され、すべてのオブジェクトが正常にロードされたかどうかを確認します。System Manager が稼働しているマシンで、次の作業のいくつかを実行する必要があります。

- System Manager への接続を試行して、IBM Object Request Broker (ORB) が正常に稼働していることを検証します。
- WebSphere MQ キューが、エラーがなく正常に作成されロードされていることを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「統計」を選択して、すべてのキューが適切な場所にあることを確認します。
- すべてのコネクタが指定のキューを正常に検索したことを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「システム表示」を選択して、コネクタの横のアイコンが青信号になっていること、およびコネクタの状況が「非アクティブ」であることを確認します。
- すべてのコネクタとビジネス・オブジェクトが System Manager に正常に表示されることを確認します。
- System Manager の「ツール」メニューから「Log Viewer」を選択して、ログ・ファイルのエラーをチェックします。

重要: ログ・ファイルにエラーが存在する場合は、そのエラーを解決してから、作業を継続してください。

アップグレード・バージョンのテスト

アップグレードしたシステムを開発から実動に移行する前に、IBM では、実動時のすべてのインターフェースおよびビジネス・プロセスについてテストを行うことをお勧めします。システムのテストでは、以下の項目について調べます。

- コネクタ: 各コネクタを始動して、コネクタの接続性をテストします。構成変更が行われていることを確認してください。コネクタ・ログ・ファイルでは、コネクタが指定のアプリケーションに接続できることを確認します。
- スクリプトおよびストアド・プロシージャ: スクリプトおよびストアド・プロシージャは、アップグレードされた場合のみテストする必要があります。スクリプトは、新規ディレクトリ・パス・ロケーションを含むように変更する必要があります。
- ボリュームおよびパフォーマンス: 過去にパフォーマンス測定が行われていれば、新たにパフォーマンス測定を行い、両方の結果を比較して、システムが安定していることを確認します。

アップグレード・バージョンのバックアップ

アップグレード・プロセスが完了したら、WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのバックアップを作成します。60 ページの『システムのバックアップ』を参照してください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus へのアップグレードは完了しました。オプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする場合は、39 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』または 45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』を参照してください。

付録 A. ハードウェア要件とソフトウェア要件の適合

このセクションのトピックでは、システムのハードウェア要件およびソフトウェア要件、サポートされるデータベース、WebSphere Business Integration Server Express ソフトウェアおよび Express Plus ソフトウェアの実行に必要なユーザー・アカウントの概要を説明します。

このセクションの内容は以下のとおりです。

- 『ハードウェア要件の確認』
- 『ソフトウェア要件の確認』
- 72 ページの『データベースの最小必要要件の確認』
- 73 ページの『ユーザー・アカウントの作成』

ハードウェア要件の確認

IBM では、専用システムで WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を実行することをお勧めします。このシステムは、セキュリティー維持のためにアクセスを制限する必要があります。

表 3 には、最小限のハードウェア要件を示します。ただし、個別の環境の複雑さ、スループット、およびデータ・オブジェクト・サイズによって、実際にはより高いハードウェア要件が使用システムに求められることがあります。また、以下の情報は WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムのみを対象としています。同じシステム上で他のアプリケーションを実行する場合は、適切な調整を行ってください。

表 3. ハードウェア要件

コンポーネント	最小要件
プロセッサ	Pentium III (1 GHz)
メモリー	512 MB 以上
ディスク・スペース: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus およびサポートしているソフトウェア	40 GB
ディスク・スペース: WebSphere Business Integration Server Express データベースまたは Express Plus データベース	<ul style="list-style-type: none">• リポジトリ 300 から 500 MB• ロールバック 500 MB• 一時 500 MB

ソフトウェア要件の確認

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムは、IBM コンポーネントおよびサード・パーティー・コンポーネントから構成されます。IBM コンポーネントは、製品 CD で配布されます。サード・パーティー・ソフトウェアは、IBM からは提供されません。

ソフトウェア要件については、次の表を参照してください。

- 表 4 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus がサポートされている Linux のバージョンを示します。
- 表 5 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属の必須ソフトウェアを示します。
- 71 ページの表 6 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属していない その他の必須ソフトウェアを示します。
- 71 ページの表 7 には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus と組み合わせて使用できるオプションのサポート対象ソフトウェアを示します。

IBM では、71 ページの表 6 および 71 ページの表 7 に示したサード・パーティー製品のバージョンをサポートしています。サード・パーティー・ベンダーによるサポートが終了したバージョンのサード・パーティー製品のいずれかに問題が発生した場合は、サポートされているバージョンへのアップグレードが必要なことがあります。

表 4. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサポートされている Linux のバージョン

ソフトウェア	バージョンおよびパッチ	実稼働環境でサポートされている製品コンポーネント	開発環境でサポートされている製品コンポーネント
Red Hat Enterprise AS Linux	3.0, Update 1	このバージョンの Linux では、InterChange Server Express、Administrative Toolset Express System Monitor ツールおよび Failed Event Manager ツール、およびアダプターがサポートされています。	サポートされているコンポーネントはありません。
SuSE Linux Enterprise Server	8.1, SP3	このバージョンの Linux では、InterChange Server Express、Administrative Toolset Express System Monitor ツールおよび Failed Event Manager ツール、およびアダプターがサポートされています。	サポートされているコンポーネントはありません。

表 5. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属のソフトウェア

ソフトウェア	バージョンおよびパッチ	コメント
IBM WebSphere MQ サーバーおよびクライアント	Red Hat Linux の場合: Red Hat Linux 3.0 の場合は、バージョン 5.3.0.2 (CSD06 および iFix を適用) SuSE Linux の場合: バージョン 5.3.0.2 (CSD06 を適用)	

表 5. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属のソフトウェア (続き)

ソフトウェア	バージョンおよびパッチ	コメント
IBM DB2 Universal Database Server および Client, Express Edition DB2 ストアード・プロシージャを作成するには、DB2 にサポートされている C または C++ コンパイラが必要です。	バージョン 8.1 FP5	
IBM WebSphere Application Server, Express Web Application Server	バージョン 5.1	System Monitor および Failed Event Manager 向け。
IBM JCE	バージョン 1.2.1	
IBM Java Development Kit	バージョン 1.3.1_07	コラボレーションおよびマップをコンパイルするために必要。
IBM JRE	バージョン 1.3.1_07	
IBM JSSE	バージョン 1.0.3	Adapter for XML および Adapter for Web Service に対して暗号サービスを提供。
IBM Object Request Broker (ORB)	バージョン 1.3.1_07	

表 6. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus には付属していないが、(機能に基づく) 必要な前提条件ソフトウェア

ソフトウェア	バージョンおよびパッチ	コメント
Adobe Acrobat Reader	バージョン 4.05 以上	文書を表示するために必要。IBM では、PDF 検索機能を利用できるようにするため、検索オプションを備えた Acrobat Reader の使用をお勧めします。使用するプラットフォームに対応した Adobe Acrobat Reader の最新バージョンについては、 www.adobe.com を参照してください。
Netscape Navigator	バージョン 4.7x	文書を表示するために必要。
GNU/Linux g++	バージョン 2.9.5.3 または 2.96	DB2 UDB Express を使用してストアード・プロシージャをコンパイルするとき必要。

表 7. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus と組み合わせて使用するための、オプションでサポートされているソフトウェア

ソフトウェア	バージョンおよびパッチ	コメント
サポートされているデータベースは、付属の IBM DB2 UDB Server および Client Express Edition を置き換えることができます。		

表 7. WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus と組み合わせて使用するための、オプションでサポートされているソフトウェア (続き)

ソフトウェア	バージョンおよびパッチ	コメント
IBM DB2 Universal Database Server および Client Enterprise Server Edition (DB2 ストアド・プロシージャの作成には、DB2 をサポートしている C コンパイラまたは C++ コンパイラが必要です)	バージョン 8.1、FP 2 Enterprise Server Edition	この製品には、DB2 をサポートしているコンパイラは付属していません。
System Monitor および Failed Event Manager 向けのサポート済み Web アプリケーション・サーバー (すべてのアプリケーション・サーバーが WebSphere Application Server Express Edition バージョン 5.1 を置き換え可能)		
WebSphere Application Server	バージョン 5.0.2.4 FP4 または 5.1	JSP 1.1 以上およびサーブレット 2.2 以上をサポートするすべての Web アプリケーション・サーバー。
WebSphere Application Server Express	バージョン 5.0.2.4	JSP 1.1 以上およびサーブレット 2.2 以上をサポートするすべての Web アプリケーション・サーバー。
Tomcat	バージョン 4.1.24 または 4.1.27	JSP 1.1 以上およびサーブレット 2.2 以上をサポートするすべての Web アプリケーション・サーバー。現時点では、2 バイト文字セット (DBCS) はサポートされていません。

データベースの最小必要要件の確認

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus は、IBM DB2 Express バージョン 8.1 FP5 および IBM DB2 Enterprise バージョン 8.1 FP2 との組み合わせ使用が認証されています。

DB2 Express または Enterprise は、次の基準を満たすように構成する必要があります。

注: DB2 ストアド・プロシージャを作成するには、DB2-stored にサポートされている C または C++ コンパイラが必要です。ストアド・プロシージャの詳細については、DB2 資料を参照してください。

- データベースおよび表作成特権を持つ WebSphere Business Integration Server Express 管理者ユーザーまたは Express Plus 管理者ユーザーが作成されている。
- データ・ファイルのディスク・スペースとして 50 MB が InterChange Server Express リポジトリ・データベースに使用できる。
- maxappls および maxagents パラメーターがそれぞれ 50 以上のユーザー接続で構成されている。
- マッピング・テーブル (オプション) 用表スペースが 50 MB 以上のデータを格納できるように構成されている。

- アプリケーションの最大ヒープ・サイズが 2048 以上になるように構成されている。

ユーザー・アカウントの作成

Launchpad を使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールする前に、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールを担当するユーザーを作成する必要があります。

新規ユーザーを作成するには、以下の手順を行います。

1. Linux システムに root ユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを実行してユーザーを作成し、そのユーザーのパスワードを設定します。
`/user/sbin/useradd -d HomeDirectory -g InitialGroup -G OtherGroups -m user_name -p user_password`

付録 B. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus および Capacity Pack のサイレント・インストールおよびアンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus、Adapter Capacity Pack、または Collaboration Capacity Pack のインストールおよびアンインストールは、提供されている GUI を使用せずに実行できます。サイレント・インストールおよびアンインストールは、コマンド行から実行します。

サイレント・インストールでは、通常、インストーラーの実行時に手動で指定する応答は、付属のテンプレート応答ファイルに格納されます。このファイルは、その後コンポーネントをインストールする実行可能プログラムによって読み取られます。実行可能プログラムを実行する場合は、先にこの応答ファイルに必要な変更を必ず実行してください。設定可能なオプションについて記述している資料は、各ファイル内にあります。

サイレント・アンインストールでは、応答ファイルの使用が必要な場合とそうでない場合があります。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール』
- 76 ページの 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール』
- 76 ページの 『Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 77 ページの 『Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール』
- 77 ページの 『Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 78 ページの 『Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール』

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus をサイレント・インストールするための応答ファイルは、CD ルートの Launchpad ディレクトリに置かれており、次のように名前が付けられています。

- WebSphere Business Integration Server Express のサイレント・インストールの場合: `WBIserverExpressResponseFile.txt`
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のサイレント・インストールの場合: `WBIserverExpressPlusResponseFile.txt`

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件および WebSphere Business Integration

Server Express または Express Plus のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。

2. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

```
mount_point/Launchpad/setupLinux.bin -silent -options <response_file_name>
```

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のすべてのコンポーネントをサイレント・アンインストールするには、次の手順を実行します。

1. WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境にあるディレクトリー `ProductDir/_uninstWBIServerExp` から、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境にあるディレクトリー `ProductDir/_uninstWBIServerExpPlus` に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

```
uninstaller.bin -silent
```

要確認:

1. 製品をアンインストールするユーザーは、製品をインストールしたユーザーと同じでなければなりません。この 2 つの作業を同じユーザーが実行しないと、アクセス権の問題が発生することがあります。
2. `Home_directory/IBM/WebSphereServer` ディレクトリーは、場合によっては手動で削除する必要があります。

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール

要確認: InterChange Server Express のアダプター・ライセンス・ファイルがインストールによって更新されたことを確認するには、インストール処理時に InterChange Server Express が稼働している必要があります。

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、`adaptercp_silent.txt` で、このファイルは、CD のディレクトリー `Launchpad/AdapterCapacityPack` に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、39 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。
2. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。

3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

```
mount_point/AdapterCapacityPack/setupxLinux.bin -silent
```

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール

要確認: InterChange Server Express のアダプター・ライセンス・ファイルがアンインストールによって更新されたことを確認するには、アンインストール処理時に InterChange Server Express が稼働している必要があります。

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、`adaptercp_silent_uninst.txt` で、このファイルは、CD のディレクトリー `Launchpad/AdapterCapacityPack` に置かれています。

サイレント・アンインストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. CD から `adaptercp_silent_uninst.txt` 応答ファイルをディレクトリー `ProductDir/_uninstAdapterCP` にコピーします。
2. アンインストールに必要な設定について応答ファイルを変更します。
3. ディレクトリー `ProductDir/_uninstAdapterCP` に移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

```
uninstaller.bin -silent -options adaptercp_silent_uninst.txt
```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、`collabcp_silent.txt` で、このファイルは、CD のディレクトリー `Launchpad/CollabCapacityPack` に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。
2. 応答ファイルを CD メディアからコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

```
mount_point/CollabCapacityPack/setupxLinux.bin -silent ¥  
-options collabcp_silent.txt
```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. ディレクトリー *ProductDir/_uninstCollabCP* に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

```
uninstaller.bin -silent
```

特記事項

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Burlingame Laboratory Director
IBM Burlingame Laboratory
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを

経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

注: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM
IBM ロゴ
AIX
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
Lotus
Lotus Domino
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
Tivoli
WebSphere

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

この製品には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org/>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1、WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アップグレード
アップグレードする前に 59
アップグレード・バージョンのテスト 67
既存システムの準備 60
検証 67
システムのバックアップ 60
失敗のチェック 66
WebSphere Business Integration Server Express Plus の開始 66
アンインストール
Adapter Capacity Pack 43
Collaboration Capacity Pack 48
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 30
インストール
概要 1
ソフトウェア前提条件 13
Adapter Capacity Pack 39
Collaboration Capacity Pack 45
DB2 Express 15
IBM Java Development Kit 20
WebSphere Application Server Express 18
WebSphere MQ 19
WebSphere Studio Site Developer 57
応答ファイル
Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール 77
Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール 76
Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール 77
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール 75

[カ行]

管理
InterChange Server Express 34
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 33

「クイック・スタート・ガイド」、表示 6, 37
構成
ネーム・サーバー 28
DB2 15, 17

[サ行]

再始動, InterChange Server Express の 36
サイレント
Adapter Capacity Pack のアンインストール 77
Adapter Capacity Pack のインストール 76
Collaboration Capacity Pack のアンインストール 78
Collaboration Capacity Pack のインストール 77
DB2 Express のインストール 15
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール 76
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 75
WebSphere MQ のインストール 19
始動
InterChange Server Express 33
Launchpad 3
System Manager 34
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus 33
前提条件
ソフトウェア 8, 13, 69
ハードウェア 69
ソフトウェア前提条件
インストール 13
確認 69
検査 8
[タ行]
次のステップに進む
ソフトウェア前提条件の検査およびインストール 6
Adapter Capacity Pack のインストール 37
Collaboration Capacity Pack のインストール 37, 44
Launchpad の基本機能の学習 2

次のステップに進む (続き)
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus インストールの検証 36
WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus の始動 31
WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 へのアップグレード 37
ディスク・スペース要件 69
登録, InterChange Server Express の 34

[ナ行]

ネーム・サーバー, 構成 28

[ハ行]

ハードウェア要件 69
パスワード, InterChange Server Express, 変更 35
表記上の規則 vi
プロセッサ, 最小必要要件 69

[マ行]

メモリー, 最小必要要件 69

[ラ行]

ライセンス・ファイル, 更新 42
ログ・ファイル, WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus インストール 29

A

Adapter Capacity Pack
サイレント・アンインストール 77
サイレント・インストール 76
GUI を使用したアンインストール 43
GUI を使用したインストール 39

C

Capacity Pack
アダプター 39
コラボレーション 45

Collaboration Capacity Pack

- サイレント・アンインストール 78
- サイレント・インストール 77
- GUI を使用したアンインストール 48
- GUI を使用したインストール 45

D

DB2

- 構成 15, 17
- 最小基準 72

DB2 Express、インストール 15

F

Failed Event Manager

- 手動構成による Tomcat の使用 56
- 手動構成による WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Express の使用 52
- ディレクトリーのロケーション 29
- Web サーバー使用時の構成 53
- Web サーバー不使用時の構成 54
- WebSphere Studio Site Developer のインストール 57

I

IBM Java Development Kit、インストール 20

InterChange Server Express

- 管理 34
- 再始動 36
- 始動 33
- 登録 34
- パスワードの変更 35
- System Manager への接続 35

J

Java Development Kit、IBM、インストール 20

L

Launchpad

- 「クイック・スタート・ガイド」の表示 6, 37
- 始動 3
- ソフトウェア前提条件のインストール 13
- ソフトウェア前提条件の検査 8
- 停止 6

Launchpad (続き)

- Adapter Capacity Pack のインストール 39
- Collaboration Capacity Pack のインストール 45
- WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus のインストール 22

S

System Manager

- 始動 34
- InterChange Server Express への接続 35

System Monitor

- 手動構成による Tomcat の使用 55
- 手動構成による WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Express の使用 52
- ディレクトリーのロケーション 29
- Web サーバー使用時の構成 53
- Web サーバー不使用時の構成 54

W

WebSphere Application Server Express、インストール 18

WebSphere Business Integration Server

- Express and Express Plus
- インストールの検証 37
- 管理 33
- サイレント・アンインストール 76
- サイレント・インストール 75
- 始動 33
- ディレクトリー構造 28
- GUI を使用したアンインストール 30
- GUI を使用したインストール 22

WebSphere Business Integration Server

- Express および Express Plus のインストールの検証 37

WebSphere MQ、インストール 19

WebSphere Studio Site Developer 57



Printed in Japan